
それから勇者はどうなった？

餅国

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

それから勇者はどうなった？

【著者名】

Z6565R

【作者名】

餅国

【あらすじ】

魔王を倒した勇者は、國への凱旋の後に突然死んでしまいました。勇者の仲間たちは知らせを聞いて、疑問を持ちます。なぜこんなに強かつた勇者がこんなにも簡単に死んでしまったのか。もしかしたら裏に何かあるのか。彼らは調べ始めます。まずはそんなお話をします。

〇話 プロローグ（前書き）

小説を読むのは好きでしたが、こつやつて自分で書くのは初めてです。つたない文章ではありますが、誰かの暇つぶしにでもなれば幸いです。

0話 プロローグ

城の一室には、燭台がひとつ備えられていた。部屋は薄暗い。燭台から少し離れてしまえば、その場にいる者たちの表情など全くわからないだろう。

またどこからか風が入り込んでいるらしく、ロウソクの炎がゆらゆらと揺れていた。その炎はいつ消えてもおかしくないようであった。

その部屋には三人の男女がいた。

一人は筋骨たくましい体をした男だった。目をつぶり静かに腕を組んでいた彼は、その見た目から前線で戦う戦士職であることが分かる。その太い腕を一度振るえば、目の前の敵など簡単に吹っ飛んでしまうに違いない。

また短く刈った髪とそのたくましい顔つきは見る人に野性的な印象を与えるが、どことなく品の良さが感じられた。育ちの良さによるものかもしぬれなかつた。

残りの二人は女性である。

そのうち、すらっと背の高い方の女性は、左手で右手の手首の辺りをつかんでいた。何かを押さえつけているようであつた。彼女は回復を担当する術士という職業をしている。

彼女の黒く長い髪は白い肌に良く映えていた。またきゅっと引き締まつたその顔は、何か本能に訴えかけるものを持っている。横をすれ違えば思わず振り向いてしまうような、美しい女性だった。

また背の低い方は魔法使い、後方からの攻撃役を担当している女性だ。いや、女性と言うよりも女の子と言つた方が良いかもしない。完全に成長しきっていない可愛らしい顔をしていた。少し赤みがかつた綺麗な髪を、肩まで伸ばしている。

彼ら三人はその部屋で一言も口をきかなかつた。ただただ静かに立つていた。目の前にはベットがある。

そこでは一人の男が冷たくなつた身体を静かに横たわらせていた。その顔は驚くほど白く、また無表情だ。

彼の名前はウェルといつ。

かつて彼は、魔王を倒した勇者だった。

彼を見つけたのはたまたま通りがかつた商人であつた。

少しばかり遅れた予定を取り戻そと、その商人は先の街で聞いた森の抜け道を通ろうとしていた。しかし、慣れない道に彼は迷つてしまい、だいぶ森の奥に入り込んでしまつたのである。いまさら元来た道を戻ることも難しい。そんな彼が半分自棄で馬車を走らせていると、道から少し外れたところに男が倒れているのを見つけた。

“森で迷い、行き倒れてしまったのだろうか”

我が身と重ね合わせ、少し怖くなつた商人であつた。そのまま通り過ぎてしまおうかと思った。しかしこのまま男を放つておけば、早晚動物の餌となつてしまつるのは明らかである。それならばこの場に埋めてやるのがせめてもの情けかと思い、彼は馬車を止めてその男に近づいた。

「つ伏せに倒れているのは、鍛えられた身体をした若い男だった。それを見て、最初に頭に浮かんだのが“もつたいない”という感覚だったのは、言つまでもなく不謹慎であつたが、それはそれで商人として必要なものなのかもしない。

静かに手を合わせた後、商人は彼の腕を掴んだ。色がすっかり変わつてしまつた爪を見て、彼がすでにこと切れていることを確信する。そのまま身体を起こして仰向けにしてやると、今度は両手を胸の上で組ませようとした。その時初めて男の顔をはつきりと見る。

すると、あることに気付いた。おぼろげではあるがどこかで見たことのある顔なのである。彼は一度その男から離れて、最近の出来事を思い出そうとした。

“ ついえつこの前、魔王が討伐された時の記念式典で・・・”

田の前にいるのが民衆に手を振つていた勇者である、と気付いたのはまさにその時であった。

はじめは跳びあがるほどに驚いた商人だが、割に早い段階で彼は冷静さを取り戻した。あまりに大きすぎるショックは、逆に彼を冷静にさせたのかもしれない。そして、まさかこのまま勇者を埋めるわけにはいかないと商人は考えた。

商人は冷たくなつたウェルの体を抱えあげると、馬車まで連れて行つて荷車に乗せた。幸運なことに仕入れに行く途中だったので荷台は空いている。彼もすぐに馬車に乗り込むと、急いで馬を走らせた。

やみくもに馬車を走らせて、いろいろな道に迷ったが森を抜けだすことができたのは幸運なことであった。しばらくして知っている道に出た商人は最寄の街へと矢のように突き進んだ。そうして今の状況に至るのである。

勇者が死んだという知らせは瞬く間に世間に広まった。

その影響を考え、王は勇者の死をしばらく隠そうとしたが、人々の口に戸は立てられなかつた。日に日に噂が広まつて、これを踏まえて王は方針を変えた。勇者の死を公式に認めたのである。そして、偉大な功績を残した勇者を称えるため、壮大な国葬で弔うことになったのだった。

そして明日、ついにその国葬が開かれる。今は、勇者と共に戦つた仲間たちが最後の別れを告げているところであった。

1話 勇者の仲間たち。

「もう大丈夫か？」

「・・・」

ヴェルチンの問いにルニアは答えなかつた。聞こえていないといふことはないのだから、つまり答えたくないのだろう。答えてしまえば部屋から出なくてはならない。だからずっと黙つてしているのだ。

その気持ちはヴェルチンにも分かつた。しかし、いつまでもここにいるわけにはいかない。もう一度小さく声をかけたヴェルチンだつたがやはり反応はなかつた。仕方なく彼は手を伸ばす。

その手は、ルニアの肩に触れそうになつたところでぴたりと動きを止めた。ルニアが小さく震えていたからだ。彼女は溢れだしそうな感情を必死で堪えていたのだった。

ヴェルチンは触れそうになつた手を引っ込めて、下を向く。どうしようもない無力さに襲われた。

すると、一連の流れを見ていたエミリアがそっとルニアへと寄り添うように立つた。彼女はルニアに優しく声をかける。同時にそつと手を肩に乗せた。それで堪え切れなくなつたのだろう、ルニアは彼女に抱きついた。そして大きな声で泣きはじめる。エミリアも包み込むようにルニアを抱きしめ、髪を優しくなでた。

静まり返つた一室には、その泣き声だけが響いていた。

しばらくして、ルニアが落ち着いたところで部屋を出ることになった。

ヴェルチンが先頭に立ち、ドアを開ける。そして休憩室として用意されていた部屋に向かった。またエミリアは部屋へ向かう間、ずっとルニアの手を握っていた。自分は傍から離れないと言外に表しているようであった。

部屋に入ると、ルニアとエミリアは手をつないだまま、一人掛けのソファーに座った。ヴェルチンもその近くの椅子に腰かける。そして、しばらく考えるような顔をした後、ルニアに話しかけた。

「・・・これ以上泣くな、ルニア。おまえがその調子だと、ウェルが死に切れないだろ」

それを聞いてルニアがまた顔をゆがませる。エミリアはルニアの手を強く握りしめ、何を言い出すのだとヴェルチンをにらみつけた。

「そういう言い方はやめて、ヴェルチン。ルニアはまだウェルの死を受け入れられていないのよ」

その口調は明らかにヴェルチンのことを責めていた。いくらなんでも言い方があるだろ」と。しかしヴェルチンは反論する。

「いや、受け入れるも何もウェルは死んじまつたんだ。さつき俺たちはこの目で確認した。受け入れるしかない。受け入れるしかないんだ。確かに今のは多少言い方が悪かったかもしれないが。俺たちはこれまでの戦いでいつ死んでもおかしくなかつた。とっくに覚悟はできていたはずだろ？」

気丈な声であつた。

強い言い方にはなつてしまつたが、ヴェルチンとしても早くルニアに立ち直つてほしかつた。ヴェルが死んでしまつたことは事実だ。変えようがない。だからこそルニアはその死を受け入れ、それを乗り越えなければならぬ。ヴェルも望んでいることだらうと思う。だからこそ彼はそう振舞つた。しかし今度は、エミリアが反論する。

「いいえ。理解することと受け入れることは違うわ。ヴェルチン。身近な人の死を簡単に受け入れることが出来るはずがないでしょ。それに・・・。私たちは生き残つたの。全てやり遂げたの。これからまたちゃんと生きられるはずだつたの。なのに、どうしてこんな・・・」

始めは毅然とした声であつたが、最後の方は言葉にならないようだつた。魔王を倒してからまだ三ヶ月ほどしか経つていない。誰もまだ元の生活に馴染んでもいないのに、どうしてこんなことになつてしまつたのか。ルニアほどではないにせよ、エミリアもまた混乱していた。

しかしそれはヴェルチンも同じだつた。

気丈に振る舞つてはいるものの、その目の下は落ち窪んでいる。知らせを聞いてからといつもの、彼はろくに寝れていないのだった。苛立ちを押さえきれず、エミリアたちに対する配慮すらできなくなつていて。

なんとも言えない息苦しさが一人の間には感じられた。

そんな中、突然ルニアがつぶやいた。

「ウエルが・・・死ぬわけない・・・」

「え?」

Hミリアがルニアの方を向く。

「そう、ウエルが死ぬわけない。だって、また会おうって約束したんだからー。」

最初小さかったその声は、段々と力強くなつていった。さつきまで泣いていたとは思えないような強い声だ。Hミリアとウェルチんはなんと言つていいか分からず、黙つたままでいた。

「だつて、おかしいよ! ウエルは怪我ひとつ負つてないんだよ! それなのに・・・どうして死んだつていうの?」

確かにウェルの身体には目立つた外傷はなかつた。遠くから見れば、まるでただ寝ているかのように見えてもおかしくはない。

「医者は心臓が発作を起したんだろうと言つたらしいな。これまでの戦いで心臓に負荷が掛かり過ぎていたんだろうとかなんとか。詳しいことは分からないが、そう言われば頷くところもある。気付かないだけで、俺たちは皆無理をし過ぎていたのかもしれない」

「このことはルニアも聞いているはずだが、何か言わずにはいられなかつたのだろう。改めてウェルチンはルニアに言った。

「俺たちも身体には気をつけないとな」

すぐにHミリアが反応する。

「あなたは馬鹿みたいに頑丈だから大丈夫よ」

ヴェルチンは肩をすくめた。先ほどのお返しのようだ。しかし内心では、エミリアも少し調子が戻つたのかもしれないと安心していた。

「まあ、俺のことはどうでもいいとして・・・。ウェルは俺たちのリーダーだったんだ。その心労もあつたんだろう。俺たちを死なせるわけにはいかないってな」

確かにウェルは責任感の強い男だった。

自分の仕事をきつちりとこなし、その上で仲間のフォローをするのである。また誰かが傷ついた時はまるでそれが自分のせいであるかのように悔やんでいた。

「それはそつかもしれないけど。でも少しくらい兆候があつてもいいんじゃないかしら。仮に心臓が悪かったのだとしたら、胸が苦しくなるとか動悸がするとか。私たちは長いこと一緒にいたはずだけど、ウェルの具合の悪そうな時なんか見たことないわ」

勇者一行の回復役であったエミリアは、周囲の健康状態についても気を配っていた。そんな自分が全く気付かないことなどあるだろうか。あなたは?とエミリアはルニアの方を見る。ルニアは左右に大きく首を振った。

「そう・・・。でもそれも変。私たちがパーティーを組んでいる間、ルニアはずっとウェルのそばにいたのよ。それこそ四六時中、ルニアはずっとウェルのことを見ていた。それで何も気付かないなんておかしいと思わない?」

ルニアは旅の間、よつぱびのことがない限りウェルのそばを離れなかつた。それほど近くにいて、体調の変化に気付かないことはないだろう。話を聞きながらウェルチンは何か考えているのか、一言も発しない。

「それに・・・ウェルの見つかつた場所もおかしいわ。どうしてあんな人気のない所に一人で行つたというの。彼の家からは距離があるし、また特になにがあるつてわけでもないし」

ウェルチンはおかしくなつてきた話の流れに釘を刺そうとする。

「それはあれば、あいつはあまり人の多い所がすきじゃなかつたからな。なるべく人がいないところに引っ込もうとしたんじゃないか、家でも建てようとして、・・・」

Hミリアはすぐに反応する。

「それならもつといい場所があるはずよ。森で暮らすのはあり得るかもしけないけど、いくらなんでもあそこは森の奥過ぎて不便だわ。それにたとえ自給自足するにせよ、ウェルは全く人と触れ合わないで生きようとする人ではなかつたでしょ？」

今度はルニアが首を縦に振つて、その言葉に同調した。一一対一の状況に、ウェルチンは黙つてしまつ。

「そうなると・・・彼は本当に心臓の発作で死んだのかしら

その言葉は、確かにきちんとした道筋を踏んで出てきた言葉だつた。しかし、だからといって無造作に触れてはいけないとこころもあ

る。一瞬で表情を変えたヴェルチンは、ざんと足音をたてて立ち上がりた。

「おい！今さら何を言い出すんだ、エミリアーすると何か？　ウヘルは誰かに殺されたっていうのか？　うだとしたらいつたい誰が？　何のために？」

実はヴェルチンもそのことを考へないわけではなかつた。しかし途中で思考を放棄していた。そんなことがあつていいはずがないと思つたからだつた。だからこそエミリアの発言に、ヴェルチンは動搖した。自分の思考放棄を見透かされたかのように感じたのだ。そして彼はそれを隠すかのように怒つたのであつた。

大きな声で捲し立てるヴェルチンを見て、エミリアはため息をついた。ヴェルチンの悪い癖が出たことに気付いたのだ。さて、どう返してやろうか。大声を出せばいいと思つてゐる男は嫌いだつた。しかし今は考へなければいけないこともたくさんある。少し逡巡した彼女は最も手つ取り早い方法を選んだ。

「あなたは何も考へることができないの？」

人を選ぶ方法であるが、少なくとも馬鹿ではないヴェルチンであれば理解してくれるだらうと想つた。もちろん結果はその通りになる。

浴びせかけられた言葉を聞いて、ヴェルチンはぴたりと動きを止めた。少し間を置いて、深呼吸する。そうして悪かつたと一言謝ると、彼はまた椅子に座り直して語りだした。

「しかしだ。いつたいどうしてウヘルが殺される？　あいつはいい奴

だつた。間違いない。俺だつてずっと一緒にいたんだ。感謝されることこそあれ、恨みに思うやつなんかいないはずだ」

ヴェルチンとて、詳しくウェルの過去を知っているわけではないが、長い間共に戦い、背中を預けた仲間としてウェルが信頼に足る人物だということは確信していた。だからこそその言葉である。

「それにあいつを殺せる奴なんかいるわけがないだろう。腐つても勇者だ。そんじょそこらの奴が束になつて掛かつても負けることなんかあり得ない」

「それは確かにそう。でも、例えば人質を取られたとか」

Hミリアも勇者がただ殺されたとするには、無理があるとは思つてゐるのだろう。

「人質つて言つたつてどこの誰を人質にするんだ？たまたまそこら辺にいた不幸な奴をか？そんな行き当たりばつたりの奴、ウェルの敵なんかじゃないだろう。目の前で人質が首に刃物突き付けられていようと、なんとかできるだろつからな」

勇者であればそのような状況でもやりようがあるはずだった。

「だから、もし仮にだぞ、もし仮にあいつが殺されたのだとしたら、それはたまたま起きたことなんかじゃない。周到に準備されていたはずだ。そしてそれは、あいつを殺したいほど憎んでいた奴がいたということなんだが・・・。さつきも言った通り、そんな奴は俺には想像がつかない」

ヴェルチンの断言に今度はHミリアが黙ってしまった。確かに誰かがウェルを憎んでいるなどHミリアにも想像ができなかつた。ル

ニアだつてそうだらう。そう思つてルニアを見ると、ルニアも今まで会つたことのある人物の中でウェルを恨むような者がいなか、必死に考えているようだつた。しかし、そのような人物は誰も思いつかないようだ。

しばし沈黙が流れる。気まずい空氣だつた。

ふと時計を見ると、だいぶ時間が過ぎていた。このまま考えていても進展は少ない。そう思つたエミリアがお茶を頼んでこようと立ち上がると、ちよつと部屋の扉がノックされた。

「失礼いたします。お茶を入れてまいりましたがいかがでしょうか？」

王の城に入つてから、ずっと自分たちの世話をしてくれているメイドさんの声がした。渡りに船である。どうぞと声をかけ、エミリアがドアを開けると、可愛らしいメイド服をきた女性がそのまま立つていて。

2話 メイドさん。

「もう少し小さな声で話された方が良いかもしません」

慣れた手つきでテーブルに人数分のお茶を置きつつ、そのメイドさんは言った。ウヘルやルニアと同じくらいこの年齢だらうか。可愛らしさにメイド服が良く似合っている。

それを聞いて、ヒミコアとルニアがヴェルチンの方を向いた。ヴェルチンは上を向いて目をそらした。

「内容が内容ですからね。ただ」「心配されることはあります。この近くには私しかおりませんし、また私がその話を広げることもありませんから」

メイドさんはこいつと微笑んだ。

本当か嘘か分からぬその言葉に、ヒミコアたちは少し戸惑った。可能性の話であるとはいえ、かなり物騒な話を聞かれてしまったのだ。もし勇者の仲間たちがこのようなことを話していたと噂が広まれば、いられぬ騒動を巻き起こすかもしれない。

そんな考えを知つてか知らずか、メイドさんは微笑んだ表情を少し曇らせた。

「私は・・・短い期間ではありましたが、勇者様のお世話をさせていただいたことがあるのです。その時に勇者様にはとてもよくしていただきました。だから、今回のこととは残念でなりません」

顔をあまり見られたくないのか、彼女は下を向いた。

「あなたは・・・ウヘルと友達だったの？」

給仕されたお茶を手にしながら、ルニアが尋ねる。それを聞いて、いいえどもないとメイドさんは胸の前で手を振った。

「恐れ多ごことではあるのですが・・・勇者様とじょよくお話をされいていただきました。勇者様の冒険譚を聞くのはそれはもう楽しくて。私はこの王都のことしかわかりませんから、勇者様のされるお話はとても面白かったのです」

メイドさんの顔を見れば、それが彼女にとって本当に楽しい思い出であったことはよく分かつた。それを見たエミリアは少し安心したようすに微笑んでいた。

「それは多分、私たちが城から帰された後の話ね。あの時は勇者だけ残して帰るのは悪いと思つたんだけど・・・」

かつて魔王を倒した後、勇者一行はその報告のためにまず王都に向かつた。そして王都に着き、魔王を倒したと王に伝えると今度はその後が大変であった。

まずは王からの有り難くも長つたらしいお褒めの言葉をいただいたかと思えば、その後には、凱旋式などの記念式典がいくつか控えていた。それはほとんど見世物のようであり、あまり人の多い場所を好まない勇者たちにとつて非常に疲れる場であつたが、しかし、彼らはいわゆる義務に近いものとして苦痛な時間をどうにかやりす

「」した。

やつとそれらが終わると、今度は各国から来賓客を招いての宴である。しかも来賓が集まるのに数週間ほど時間がかかるところとで、それまで城に滞在するようとのお達しであった。

さすがに王都に到着してから一ヶ月ほどたっていたので、皆いつたん家に帰りたがった。そのため、勇者は自分たちを一度家に帰してくれるよう王に願い出たのである。

王はそれを聞いて一瞬嫌そうな顔をした。しかし、その次にはすぐには笑顔になり、それはなかなか出来かねるところだ。話を流そうとする。しかし勇者が強く主張したため、王は半分折れた。勇者であるウェル以外が家に帰ることを許したのだった。

「あの時の王は頑なだったわね。いつたん家に帰つても宴には十分間に合ひうりでしょ？」

Hミリアがかつてのことと思に出しながら言ひ。ついでにその時の不満も思いだしたようだ。

「ウェルが強く言つてくれたおかげで、私たちはなんとか帰ることができたけど・・・結局ウェルはいつまでいたのかしら」「宴の後、勇者様はひと月半は城に滞在されたと思います」

その言葉に三人が固まつた。メイドさんは申し訳なさそうな顔をする。

「それはどうこうことだ？ 最近まであいつは城にいたといふ」と

か?」

宴の後ひと月半もいたとなれば、半月前までウェルは城にいたことになる。初めて聞いた話に、ヴェルチンが尋ねた。

「少なくとも数週間後には客も集まつて、ちゃんと宴は開かれたんだろう?噂で聞いた限りだが、それはそれは豪勢な宴だつたとか」「ええ、確かに。開かれた宴は、豪華絢爛なものでございました。その分、勇者様は多くの方と会話しなければならず、少し疲れていらっしゃるようでしたが・・・。立派に役割を果たしていらしたと聞きます」

「・・・その後は?」

ルニアが先を促す。

「はい。宴が終わった後、勇者様はこれで帰ることができると王に最後の挨拶をしようとしたのでござります。しかし、その謁見でまた王に帰宅を止められました」

「・・・なぜ?」

「勇者に『える褒美を考えているから、それが決まるまで待てとのこと』でした」

「実際メイドさんは何も悪くないのだが、やはりひどく申し訳なさそうに彼女は話す。

「そんなの家に帰つてからでもいいじゃない。決まってから呼び出せばいいじゃないの」

H//リアが再度不満を漏らした。

「恐れ多いことですが、私もそう思います。しかし王は起きませんでした。魔王を倒した勇者様に何も与えず城から出せば、それだけで王としての名折れであるとかかんとか、そのようなことを言って勇者様を引き留めたのです」

疑問の残る行為だった。王はなぜそんな頑なにウェルを引きとめたのだろうとヴェルチンは思った。しかし、三人以外誰も聞いていないとはいえ、メイドさんが自分の仕える王への不満を口にすることは、彼女の勇者への肩入れはよっぽどのことであるらしかった。

「勇者様は」「不満のようでしたが、表だつてそれを口にしませんでした。その後は一人静かに部屋で過ごされていたようです」

このメイドさんが勇者専属となつたのは、留め置かれてから少しあつた後のことだそうだ。最初はメイド仲間から、その後は勇者本人から話を聞いていたという。

「ときたま冗談を言つよつに、勇者様は不満を口にしておられました。早く帰りたいと。お顔は笑つてはおられましたが、内心はどうであつたのでしょうか。私はそんな勇者様を見るたびに、胸が締め付けられる思いでございました」

ひと月ほど前のことであるが、まるで昨日あつたことのように覚えていふとメイドさんは語る。

「勇者様にとつては、私と話すことともあまり望まれない時間の過ごし方だったのかもしれません。しかし一方で、私にとつてはとても楽しい時間でありました。まるでおとぎ話を聞く子供のように勇者様のお話に夢中になつたのです。勇者様の慰みになればと言い訳をしつつ、不相応にも楽しんでいたことをもしかしたらお怒りになる

かもしだせませんが・・・

「わざわざ二人を見る。

「・・・そんなことない。あなたはウェルと一緒にいてくれた。ありがとう」

代表してルニアが言った。

「いいえ、そんな。お礼を言われるなんて・・・」

照れるようにメイドさんの顔はほんのりと赤くなつた。
ごほんとヴェルチンはひとつ咳払いをする。

「それで？その後は？」

「ええ、そうでした。勇者様への王の褒美なのですが・・・。結局いつまでもたつても決まりませんでした。最初はおとなしく待っていた勇者様でしたが、ひと月を超える頃には、我慢し難くなつたのでしょうか。王に催促に行くことが増えました。王はまだ待つていろいろ姿勢を崩しませんでしたが、あまりに勇者様が何度も願い出るので最後の方はいらついていたと聞きます」

あの我慢強いウェルが堪えきれなくなつたと聞いて、ヴェルチンは一瞬驚いた。しかしすぐにその理由を思いつく。

「そつか・・・。ウェルは早く家に帰つて墓参りをしたかったんだろう。あいつは両親を早くに失つて、爺さんに育てられたらしいからな。その爺さんもいまは墓の下だ。あいつも墓の前でいろいろ報告したいことがあつただろうな」

「それで・・・最後はどうなつたの？」

ミリアが尋ねる。

「ここまでたつても帰れない勇者様は・・・最後に黙つて城から出ていくことを選ばれました」

マイドさんの発したその言葉に、ヴォルチンは思わず声をあげた。

「あの馬鹿！」

ミリアもさすと皿をつぶしてしまった。

「勇者様は出ていく直前、私に挨拶をしてから出て行かれました。最後に気を使つてくださつたのでしうづが、君のおかげでいくらかましに過ごせたとおっしゃられるのを聞いて、私は非常に嬉しかったのでござります」

その言葉を噛みしめるようにマイドさんさせられ。

その後、勇者は夜の闇にまぎれて城をつましく抜け出したらしく。それを知った王はたゞそう怒つていたそつだが、さすがに只に追いかけさせるわけにもいかない。おそらく自宅に帰つたのだろうと考え、すぐに城に戻るようツベルの自宅へと使者を送つたとのことである。

「私がお話をるのははこれくらいですが・・・何か参考になつたでしょうか」

喋り終わった後、長く喋り過ぎてしまつたかと不安になつたのか、マイドさんは三人に尋ねた。しかしそんなことはない。その話には、

三人の疑問に答えてくれるいくつもの重要な情報があった。

「ええ、もちろん。・・・これで少なくとも田星がついたわね」

ミリアがヴェルチンの方を振り向く。

「ああ」

ヴェルチンは重い口を開いた。

「もし、あいつが殺されたのだとしたら・・・。それには王が関わっている可能性がある」

「こうしたこどりうこわー」と?

まだよく分かっていないルニアは一人に尋ねた。

「つまりだ。まだこれは想像の話だが、ウェルは王に差し向けられた誰かに殺されたんじゃないかつてことだ」

端的にウェルチンが答える。

「話を聞いたばかりでなんだが、今はそう考える以外にない。あいつを殺したいほど恨んでいる奴なんかいくら考えても出てこないんだからな」

「・・・?王がウェルのことを恨んでいるつて言つて?」

ルニアはよく分からなかつた。ウェルは仮にも勇者である。しかも魔王を倒し、この国に大きく貢献した人物だ。称賛されることがありえても、恨まれる筋合いなどない。

「違うわ、ルニア。憎しみだけが人を殺す理由になるわけじゃない

今度はエミリアが答えた。

「これもまだ想像でしかないけど、きっと王にとつてウェルは扱いが難しい存在だったのよ」

やう言つと、エミリアは口元に手を当てた。頭に思い浮かんだことをまとめてこねりしこ。

「そうよ・・・。彼は魔王を倒した。その功績は大きいわ。誰もで
きないことをやり遂げたのだから当然ね。そして功績をあげた彼を、
王は褒め称えなければいけない。これは王としての義務よ」

頷いたのは、ヴェルチンだ。

「当然だな。パンとサー カスという言葉があるが、言つてみれば王
なんてのは人気商売の一つだ。だからこそ、国に貢献した奴を丁重
に扱わない王など価値がない」

「そう。言つてしまえばウェルはお神輿なの。記念式典の時の反応
は凄かつたでしょ? 魔王を倒し、人々の不安を取り除いた彼は、
民衆から絶大な支持を集めている。そこで王がウェルを称賛する姿
を見せれば、王の支持も増える。勇者の人気にあやかれる」

「言われてみれば納得できる」とである。しかしそれがどうして理
由になるのか。

「どうしてそれがウェルを殺す理由になるの?」

ミリアは手に持つていたカップをテーブルの上に置いて、一呼
吸置くとルニアの目を見て言つた。

「ウェルの人気はもはや王に対するそれを凌駕していたわ。記念式
典の時にはつきり現れていたけど、もちろん王もそれに気付いてい
る。そうしたら王はウェルに対してどういう感情を持つと思う?」

しばらく考えてからルニアは言つた。

「・・・嫉妬?」

鷹揚にエミリアは頷く。

「もちろんそういう感情もあると思う。俺はこの国の王なのに対してね。でも勇者のしたことは、彼以外には誰にもできない。圧倒的なものに対し、人はそれほど嫉妬を持たないものなのよ。むしろ相手との距離を客観的に見れる分、嫉妬は尊敬に変わりやすいわ」

教師が生徒に世間を教えていたようであつた。

「それじゃあ、いったいなんなの？」

焦れたようにルーニアは尋ねた。

「考えてみて。一定の地位にいる人物が何を怖がるか。王は自分の立場を奪われるかもしれないと思ったんじゃないから」

そのエミリアの言葉に首をかしげる。

「ウェルが王を追い出すかもしないと思つたの？」

「そんなはずはない。ウェルが王となり、王座にふんぞり返つている所などルーニアには想像ができなかつた。

「ウェルがそんなことするわけないのにね。でも王はそれを恐れた。民衆からの支持にウェルが心変わりするのを。誰かが持ち上げようとするのを。だから自分の田の畠へといろいろと彼をずっと置いておつとした」

ヴェルチンが身を乗り出す。

「俺たちが魔王を倒したと報告した時、王から仕官の話がきただろう？だが俺たちはそれを断つた。長い戦いに倦んでいたしな。とりあえずは元の生活に戻りたかった。しかし俺たちの考えを王は見極められなかつたんだろ？」

そこまで言つて、一度姿勢を戻した。

「つまり、俺たちの予想が当たつているなら王は小心者で器が小さいつてことだ。人が何を考えているのか、相手の立場になつて考えられない。まあ斟酌する必要もないのかかもしれないがな・・・。とりあえずはこんなところでどうだ、一応筋は通つている」

「そんな・・・」

まだ人生経験が一人ほどでないルニアは、考えもしなかつた二人の言葉に下を向く。

「それに王がウェルを殺したと考えると納得できることが多い。たとえばウェルが見つかつた時、王は当初それを隠そうとしていた。悪い影響を考えてというのも分からぬもないが、今考えるとまた違う意味を持つていてるかもしない」

王が勇者の死を表に出せない理由。それは王自身が関わっているからだとすると話も通る。

「そうね。見つかつた場所から考えると王は勇者を行方不明にしようとしていたはず。見つかりさえしなければ、勇者がいないと騒ぎになつても、旅に出たらしくとも言えども誤魔化せる。あんなに強かつた勇者がまさか死んでいるなんて普通考えないものね」

ヒリアが話を補強する。

「ああ。予定が狂つちまつて王はあわてたんだろう。勇者の人気はなお高いままだ。今勇者が死んだとなつたら、もちろん悲しむ奴が大半だろうが、もしかしたらそれをいぶかしむ奴も出てくるかもしない。見つかってしまったからには、いぶかしむ奴を少しでも減らそうと、時期をおいてから発表しようとしたんだろうが……。思つたよりも早く噂が出回つたんだな」

そこまでを聞いて、ルニアは突然立ち上がつた。部屋から出でていこうとする。

「待つて、ルニアービーへ行こうっていうのー？」

ヒリアが思わず声をあげる。

「……今の話が本当か確かめてくる

ルニアは立ち止まつてそう言つた。

「誰のところに行く気だ？まさか王のところか？」

ヴェルチンも立ち上がつた。

「今の話はただの想像でしかないんだぞ。王にそんなことは知らないと言わてしまえば、俺たちにはどうしようもない。たとえ俺たちの想像が当たつていたとしてもだ」「だから・・・それを確かめる

「おまえの魔法で脅してか。そいやつて吐かせたことを誰が信じて

くれるんだ? それじゃあただおまえが悪者になるだけだ」

冷静なヴェルチンの言葉にルーニアは悲痛な叫びをあげる。

「……じゃあどうしたらいいのー?」

沈黙が場を支配した。

ずっと黙つて控えていたメイドさんが口を開いた。

「あの、嘘うそはいわからぬはずありますか?」

王がウヘルを殺したのかもしれないといつ話を聞いていた割に冷静な様子であった。もしかしたらこのメイドさんも実は想像していたのかもしれない。

「……決まっているだろ? 真相を確かめるんだ」

皆がヴェルチンの方を向く。

「まだ俺たちが言つているのは推論にしか過ぎない。しかし、もし誰かが裏にいるのだとしたら・・・ちゃんとした証拠をつかまないとな。それも脅して手に入れたものじゃなく、誰にも有無を言わせない確実な証拠をだ」

そう答えたヴェルチンの目は、落ち窪んでいるとはいえ、少し光を取り戻していた。

3話 メイドさん。2（後書き）

誤字脱字が多くてすみません。気付き次第訂正していくます。

多くの民衆が見守る中、勇者の葬儀は滞りなく行われた。

唯一、王が勇者に対し追悼の言葉を述べている時に、ずっと王をにらんでいたルニアが椅子から立ち上がりそうになつたが、隣にいたエミリアがしつかりとその腕を掴んでいた。

またその横のヴェルチンは、葬儀の間ずっと下を向いて動かなかつた。彼がどのような表情をしているのか、周りからはわからない。ただ内心を知っているのは、隣の一人とそれを遠くから見守るメイドさんだけであった。

それから一日後。

ルニアとエミリアは、最後に勇者を診察した医者の診療所へ訪れていた。その診療所は城下町の一角にあり、屋根に大きな風見鶏が飾られているのが建物の特徴であった。

「こんにちは、レピオスさん。しばらくぶりだけどお元気そうね」

診療所のドアを開けるとすぐにその姿が見えたので、エミリアは軽く声をかけた。その声に気付き、一人を確認した年配の男は両手をあげて歓迎の意を示す。

「これはエミリア様にルニア様。よつ」「そいつしゃいました」

まさに好々爺といった風体の男である。彼の名前はレピオス。王都一の腕前と呼び名の高い腕利きの町医者・・・であった。

であった、と過去形なのはほかでもない。しばらく前に、第一線で働くには少し年を取り過ぎたということで、同じく医者となつた息子に彼は自分の診療所を譲つていたのだった。

それは能力的に支障が出たからではないのだが、そろそろ休んでもいいのではという周りの声に従つた結果であつた。なので近頃は、忙しい時に診療所に出てくるくらいで悠々自適な生活を送っている。たまたま今日は、息子の忘れものを届けに来ていた。

また、勇者一行とレピオスは面識があった。といつのも、魔王を倒す旅に出る前、勇者一行が王都に滞在してその準備を整えていた時のこと。薬や包帯などの必要な消耗品を買い慣れない一行に替わつて彼が用立ててくれたのが縁である。

彼にとって、勇者たちは息子とこより孫に近い年齢であったが、彼らが魔王を倒すために旅に出ると知つて彼はその心を打たれていった。そのため、少しでも自分にできることはないかという老婆心から、わざわざ勇者たちのところへ訪ねてきたのである。

一回りも一回りも年齢の離れた勇者一行を様付けで呼んでいるのはそういう理由があった。

ヒミリアの後ろにくつついて診療所の中へと入ったルニアは、エミリアに少し遅れて挨拶する。

「・・・じんにちは」

「ええ、こんにちは。ルニア様。お久しぶりですね。相変わらず愛らしいお姿ですね」

人の良さそうな笑顔だった。そういうえばレピオスはルニアのこと
をたいそう可愛がっていた。もしかしたら本当の孫のように思つて
いるのかもしない。

エミリアがそんなことを考へてみると、表情に気付いたのかレピ
オスはエミリアにも声をかける。

「ええもちろん、エミリア様も常にお美しいですよ。その綺麗な髪
が相変わらず印象的だ。私がもう少し若かつたら口説かねば逆に失
礼かと思つほどです」

エミリアは思わず笑つてしまつ。

「ありがとうございます、レピオスさん。でも今日はその軽口を聞きに来たわ
けじゃないの」

「それは残念ですね」

肩をすくめるレピオスだった。そして急に表情を変える。

「それで用といふのは、もしや勇者様のことありますか?」

レピオスが声をひそめて言つと、なぜわかつたのかと一人が驚く。
その顔を見て、自分の想像が当たつていると確信したレピオスだつ
た。

「そうですか。まあ立ち話もなんです。奥へどうぞ」

案内されるままに一人は診療所の奥へと入つていった。

「それで勇者様、いえ、ウェル様の事でござりますが。何度も聞か

された言葉でしょ、が、この度は残念な」とドレゼーました

診療所の奥にある休憩室の椅子に一人を座らせると、その対面に座ったレピオスは悲痛な面持ちで言った。

「ええ、本当に。実は私たちもまだ信じられない気持ちでいっぱいです。でももうお葬式も終わってしまったことだし、それだけを考えても仕方がないから」

そう言って、エミリアはレピウスの顔を見る。そして切りだした。

「今日は、ウェルを診た時のこと教えてほしいと思ってこちらに来ました。どういう状況で、何が原因でウェルは死んでしまったのか。それをできるだけ詳しく知りたいんです」

レピオスはエミリアの目を見つめ返す。意思是固いようであった。
彼は覚悟を決めたように言った。

「わかりました。本当は検死を依頼されたのは、後を継いだ息子であつたのですが、実は無理を言って私もその場にいさせてもらつたのです。だから私でよければウェル様のことをお話ししましょう」

そう言うとレピオスは一気に話しだした。

「あの時、私はこの目で確かめるまで信じないつもりでした。あれほど元気だったウェル様がこんなおいぼれより先に逝ってしまうなど・・・しかし、本当にウェル様だったのはお二人もご存じのとおりです。私は泣きました。この年になると涙もろくなつて仕方ありません・・・」

最後はかすかに声が震えていた。

「……しかし、私は思い直しました。ウェル様の最後の姿をしつかりと覚えておこうと。

また聞いた話では死因がわからないようでしたから、せめてどうしてこうなったのかをはつきりさせようと。それが私にできる精一杯のことだと思ったのです」

軽く目で手をあて涙を拭きとる。

「その上でまず一言申し上げるなり……

一呼吸置いて、レピオスは告げた。

「ウェル様の死因は、はっきりと分かりませんでした

その言葉に思わずエリシアは目を大きくした。

「それはどうこう」と?

エリシアは尋ねる。

「はい……お一人も見られたかもしませんが、ウェル様の身体にはほとんど傷がありませんでした。多少擦つた跡はありましたが、傷の場所からして近くの街まで馬車で急いで運んだ時にできた傷でしょう

傷がないのはもちろん一人も気付いていた。だからベットに横たわるウェルを見た時も、まるでただ眠っているだけのように感じら

れたのだ。

「また発見が早かったというのもあります、運び込まれた先での対応も良いものでした。だから私が診た時にも遺体の損傷はとても少ないと感じました」

「・・・声をかけたら起き上がりそうだった」

ルニアがそうつぶやくと、レピオスは、ゆっくりと頭を下めた。

「ええ、ええ、私もそう思いました。実際に起き上がってくればどうなん・・・」

レピオスが顔を歪ませる。

「それで、遺体に傷がないということはなぜかこのことなの?心臓が発作を起こしたとは聞いたけど」

ミリアがさう尋ねた。

「・・・はい。遺体に傷がないということは、つまり身体の内側で何かあつたということです。そして突然死の原因に多いのは心臓や頭ですが・・・。残念ながら、これらは身体を開いてみなければ詳しいことは分かりません」

身体を開ぐと聞いて、ルニアが下を向く。刃物があてられるウロルを想像して嫌な気分になってしまったのだろう。

「それで?」

ルニアの反応を見て、申し訳なさそうにするレピオスに、続きを

エミコアが促す。だがレピオスはまだ黙つたままであった。

「どうしたの？」

「それが・・・。私と息子はちゃんと原因を突きとめるべきだとウエル様を連れてきた城の方々に言いました。しかし、その方々は身体を開くことなど認められないと言うのです。勇者様を切り刻むなど言語道断であると」

その判断はエミコアたちにも分からなくもなかつた。この時代、解剖はあまり一般的に行われる事ではない。死因を探るために解剖されることなどほとんどないと言つていい。唯一医療の発展を考えて解剖する例はあつたが、死後に解剖される者の多くは罪を犯した者たちであつた。

「周りから見てわかる範囲で報告するよつ」と彼らは言いました。しかし、それでは死因を特定することが難しいのです。またその方々は、何かにせつつかれているのかと思うほど急いでいました。まだかまだかと私と息子に催促するのです。このような重要なことを急がせるとは、の方々はいつたい何を考えているのか

思い出して少し声を荒げるレピオスだつた。

「彼らは待ちきれなくなつたのか、可能性のある死因を聞くと、最後はウエル様を奪つていくように連れて帰りました。そしてそれが私が勇者様を最後に見た時でござります」

「そうですか・・・

話を聞いたエミコアがため息をつく。それを見たルニアは尋ねる。

「どう思つ?」

「うーん。今の話を聞いた限りでは、より疑いが深まつたかな」

Hミリアは自分の考えを口にした。

「・・・私も。そいつらが急がせたのは怪しい」

「ええ。もし私たちの考えていることが当たつているなら・・・。
どこからばれるかわからないから、なるべく人に触れさせたくない
ったのかもしれない。これは身体を開くことについても同じ。まあ
こつちは本当にそう思つたからかもしれないけどね・・・。だけど
確かに怪しいわ」

二人の物騒な会話に驚いたのはレピオスである。

「・・・どうこう」としようか?」

真剣な顔をして尋ねた。Hミリアの予想通りだ。

「これはまだ確証のある話ではないんだけど・・・。黙つていいく
れる?」

もちろんと胸を叩くレピオスを信じ、Hミリアはこれまでの経緯
を話したのだった。

「・・・そうでしたか。お一人が尋ねて来られた時に思つことはありましたが」

レピオスは組んだ腕に力を入れる。

「いえ、考えられないことではありません。お一人は長いこと國から離れていらしたので知らないかもしませんが、実は今の王は、あまり王都の民に慕われてはいないです」

突然飛び出した新たな情報に、一人は驚いた。レピオスは続ける。

「半年ほど前のことですが、王は判断を誤った事件がありました。ところのも、魔王が現れたことで土地から逃げ出す者が多くなったのは、」存じかと思います」

一人がうなずく。

「当然ですが、そのことで全体の税収は減りました。しかし、王は予算が減るのを許さなかつたのです。その分、ひとりひとりの税の負担が増えました。このような場合であれば、私はまず出費を押さえてやりくりするとか、もしくは税でなく集めるべきだと思つのですが・・・」

まあそこは気にしないでください」とレピウスは手を振つた。

「ただその時点では、不満が高まつたとはい、民衆の態度はそこ

までひどくなかったのです。一番に魔王に対する恐怖がありましたし、食料の備蓄や軍備には予算をより多く振り分ける必要があると認納得はできましたから。問題はその後です、「

レペウスは一息ついて、また語りだす。

「しばらく前に、とある小さな街が魔王の軍勢に攻められました。多勢に無勢でしたが、彼らはなんとかそれを跳ね返します。しかし、その戦いで街の守備隊や防備はほぼ壊滅状態になってしまったのです。すぐに彼らは王都へ救援を求めたのですが・・・。

王は色々と理由をつけてそこに兵や物資を送らなかつたのです。兵や物資を失うリスクに対し、小さな街を救うこととは得られるものが少ないと判断したようでした。

住民たちにはその街から離れるようにと伝えたらしいのですが・・・。住民たちは慣れた土地から離れ難かつたようです。結局その街はまた攻められ、全滅しました」

ミリアは目を大きく開いた。

「まさか、そんな・・・」

「驚かれるのも無理はありません。民を守らずして何が王だというのでしょうか。税のこともあり、王都では暴動が起こりそうになりました」

した

どうにかそれを抑えた王ではあつたが、王への支持は明らかに減つていたといふ。

「その後もこの王都はしばらく緊張状態が続きました。しかし、ちようどその頃勇者様たちが魔王を倒したとのうわさが出回ったのです。そのおかげでなんと状況が好転し始めました」

同時にいくつもの事を考えるのは難しい。人々の意識は降つて湧いた明るいニュースに惹きつけられたようだつた。これは王にとって幸運であった。

「・・・でもそれなら、王はウェルに感謝してるんじゃない？それなのに・・・？」

今まで静かに話を聞いていたルニアが、疑問に思った事を口に出す。

助けてくれた人を殺してしまうことなんてあるのだろうか。

「今の話からするとそうなるわね。ただ、相手が何度もとなく窮地を救つてくれた恩人としても、自分の保身のためだったらその人を殺してしまう人もいるかもしれない。まるでその街を見捨てたように」

「あの王ならありえないことではありますん」

レピオスはさつき話したこと少し興奮していた。当時はかなり王に対して怒りを覚えていたようだ。ヒミリアは握りしめた手を自分の口に当てて、考えている。

「とりあえず・・・これで王がウェルを自分の手元に置きたがつた理由がはつきりしたわね。ウェルの扱い次第でこれからのことが決まる状態だったのよ」

レピオスも賛同する。

「そうですな。ウェル様が王の城にいる限り、民は暴動を起こさないでしよう。だからウェル様が城の外に出たいとの願い出るのは、

王はいつでも困ったことだったでしょ「うな」

時系列に並べると「いつなる。

王は自身の判断ミスにより、民衆からの信頼を失っていた。王の立場は危うくなり、暴動も起こりそうになる。しかし勇者たちの活躍により民衆の田がそちらを向いたことで、王は一息つくことができた。そこで王はしばらく勇者を城に置いておこうとした。そうしていれば民衆の田は勇者に向いたままであろうと。

しかし勇者は城から抜け出した。そして一週間後森の中で遺体が発見される。王は医者に死因を確定させる暇も残らず、また当初その死を公にしようとはしなかった。

状況からいって、王が勇者の死に関わっていることはもう疑いようがないように思われた。ただしその理由がまだはっきりしない。“立場を奪われるかもしれない”といつ予想は捨て切れないものの、今の状況にはそぐわないようにも思ひ。

「・・・まあほんなどこかしい。あとはヴェルチンに期待しますよ！」

ミリアがつぶやいた、ちょうどその頃。ヴェルチンはある人物との面会が許されたところであった。

「お待たせしました。ノーブル様がお会いになるそうです」

ドアを開け、礼儀正しく頭を下げたノーブルの部下は、ヴェルチンにそう声をかけた。小さな一室で長いこと待たされていたヴェルチンは多少いらついていたが、そのようなことはおくびにも出さない。椅子から立ち上がり、その部下へと笑顔を向ける。

「そうですか。それでは案内をお願いできますか」

「ええもちろん。どうぞこちらです」

同様に笑顔で丁寧な受け答えをしたその部下は、ヴェルチンを連れ、ノーブルの執務室へと向かった。

ヴェルチンはこの国の貴族の一人であるノーブルに会いに来ていた。

数いる貴族の中から彼を選んだのは、ほかでもない。かつて勇者一行が魔王を倒す旅に出る前のこと、彼らが準備のため王都に滞在している時に、一番彼らのことを気にかけていてくれていたのがノーブルであった。

傲慢な人物の多い貴族の中で、ノーブルはとても人間ができるいたし、その上能力もある優秀な人物だ。それは王も分かっているのだろう、彼を頼りになる人材として、国の中重要な役職をいくつか兼任させていた。その分彼はいつも忙しそうに動いていたので、ヴェルチンが会う約束を取り付けるのも一苦労だった。

二人が執務室の前に着くと、部下は軽くドアをノックした。どうぞと声が聞こえ、部下がゆっくりとドアを開く。

その先には椅子に座ったノーブルがいた。目の前の机には書類が大量に積まれている。それらをやっと整理し終えたので、ヴェルチンは呼び出されたのかもしれないかった。その書類の束を見て、少なくとも自分にこんな仕事は無理だとヴェルチンは思った。

部下に連れてこられたヴェルチンを見たノーブルは、破顔して立ち上がった。

「これはこれはようじや、ヴェルチン殿。お待たせしてしまい、申し訳ありません」

そう言つて、部屋に備え付けられたソファーの方を指し示す。

「そちらへどうぞ。私も今参ります。おい、すまんが私とヴェルチン殿にお茶を頼む。いや、お茶よりも葡萄酒の方がいいかな？」

最後はヴェルチンを見ながら、「冗談を言うように」ノーブルは言った。ヴェルチンも苦笑しながら答える。

「いいえ、ノーブル卿。私はお茶でお願いします。今日はまだ日も暮れていませんし」

それを聞いてノーブルがまた笑う。

「ですか？それは残念。昼間から飲む葡萄酒ほど背徳的で気分が良くなるものはないのですが」

ヴェルチンが部屋の中に入るとなーブルも移動し、互いに向かい合ってソファーに座る。部下はお茶を用意するため、いったん部屋の外に出ていった。

「しかし、こりゃって話をするのは本当に久しぶりですね。機会がなかつたとはいえ、なんとも残念に思つておりました」

ノーブルはヴェルチンへ手を伸ばした。

「ええ、久しぶりです、ノーブル卿。相変わらずお元気そうでなにより。

それはさうと、しばらく会わないうちに髪に白いものが増えましたね」

その手に応えて握手をすると、ヴェルチンもまた軽口をたたく。

「はは、これは恥ずかしい。私もまだまだ若いつもりなのですが、身体はそはないかないようです。最近は色々とたてこんでありますし」

笑いながらノーブルは頭に手をやると、少し薄くなつた髪をなでた。

「いやいや、そんな情けないことを言つようでは困ります、ノーブル卿。この国はあなたの手腕に支えられていると言つても過言ではないのですから。しかし、その書類の束を見る限りでは、本当に忙しいようですね。そのような時にお時間を取つていただいて感謝します」

そう言われて、ノーブルはとんでもないという顔をする。

「いえいえ、ヴェルチン殿が気にされる事はありません。私も仕事ばかりでは気が滅入つていまいりますし、それに、もしかしたら誰か訪ねてこられるのではないかとは思つっていたのです」

ノーブルの発したその言葉に、ヴェルチンは表情を真剣なものに変えた。

「それはまた、いったいどういうことでしょう、ノーブル卿？」

ノーブルもまた真剣な表情で答える。

「ええ。ただそれにお答えする前に、もう少しお待ちいただいていても？ヴェルチン殿。話をするのは飲み物を持つてくるよう命じた部下が戻ってきてからにしましょう」

そう待つことはなく、その部下はお茶と茶菓子を持って戻ってきた。そしてそれを飲みながら、ノーブルは勇者の発見からこれまでのことを説明した。

彼にとつてもまず、勇者の死は信じられないことであった。魔王を倒した勇者がそれほど簡単に死ぬわけがない。だからこそ原因を突き止めるため、王都一番の医者であるレピオスたちに遺体を再度調べさせたのだ。

しかし期待とは異なり、勇者の死の原因をはつきりと特定することはできなかつた。そして原因不明で勇者が死んだなどと、少し前まで勇者の存在に酔いしれていた民衆に発表するわけにはいかない。

そこで可能性のある原因の一つが、勇者は心臓が発作を起こして死んだということとした。これまでの戦いで身体に過度な負荷がかかっていたのだと至極もつともそつた理由がつくからである。

「せめて私たち三人にはもう少し説明があつてもよかつたのではないか？」

問いただすよつこ・ヴェルチンは言った。

「それに関しては弁解のしようがありません。本当に申し訳なく思います」

ノーブルは頭を下げた。

「私も皆さんに直々に会つてお話をしたかったのですが、ただでさえ多かつた仕事がさらに増えたため、今まで身動きがとれませんでした。命を失う心配のなくなつた民たちが土地に戻つてきておりまし、またこれまで出来なかつた都市の整備を大急ぎでやらねばなりません。身体がもう一つ欲しいとどんなに思つたことが」

話せなかつたことをずつと悔っていたようであつた。

「・・・いや、ノーブル卿。すみませんでした。今のは忘れてください。」

予想できる」とをわざわざ語りてしまつたヴェルチンは、すぐに後悔して謝る。

「いえ、いいのです。あなたも大変な思いをされたでしょうからな

全く気分を害したようではないノーブルは、むしろヴェルチンを慮るかのように答えた。ヴェルチンは時間がたち、少し冷めてしまったお茶を一気に飲み込む。そして切りだした。

「実はほかにも尋ねたいことがあるのです。・・・はい。私たちがウェルを残して帰った後のことです」

改まつた言葉に鷹揚につなずいたノーブルだが、その言葉を聞くと少し苦い顔になつた。

「お話して頂けるでしょうか？」

「ええ。ええ、そうですね。よく考えたらあなた方はその後のことを見らないのでしたな。いいでしょう、お話しします」

そう言って話出したノーブルの話は次のようであった。

三人が帰つた後、ウェルはおとなしく用意された一室で静かに控えていたという。動くといえば、たまに城の中庭を散歩する程度だつたそうだ。ノーブルも、ウェルに不自由をかけているとは思つていたが、なかなか声をかける暇もなく、ゆっくりと話をすることもできなかつた。

そして各国から客を招いての宴が開かれた。ノーブルは会場に軽く顔を見せた程度であり、あとは仕事のためすぐ立ち去つてしまつたが、かるうじて遠くから見えたウェルの姿は無理をして笑つているようだつたという。それでもこれでウェルも帰れるのだとその時は安堵していた。

「しかし、その後も勇者は引き留められたようですが

ヴェルチンが問いただすと、ノーブルはより一層苦い顔になった。

「私もあれでウェル殿はいつたん帰れると思つていたのです。傍目から見ても限界がきているようでしたから、これ以上残すのは難しいのではないかと。もちろん城にはまた来ていただくことになつたでしょうが、無理をさせるつもりはありませんでした。

しかし、ウェル殿が最後の挨拶に来た時に突然王が言い出したのです。もう少し滞在してほしいと」

ヴェルチンはそう話すノーブルの顔をじっと見つめている。

「褒美を考えるといつことでしたが？」

「ええ。名田は確かにそうでした。しかし私は何も聞いていません。まさか王が私にも相談することのないまま、突然そんなことを言い出すとは・・・。私は驚いてしまいました。

褒美を「えることなどはウェル殿が為したことを考えれば当然のことでしょう。ただ、あれほど帰りたいと願い出していた者に対し、それを引き留めるなど普通のことではありません

まだ帰ることができないと聞いた時のウェルの顔を思い出して、ノーブルは悲しそうな顔をした。

「私もできる限りウェル殿の援護をしたのですが結局は・・・。ウェル殿はかなり悩んでいたようでした。王もその姿を見ればすぐにわかつたはずなのですが

結局、強制に近い形で城に残ることになつたウェルは、表面上はまた静かに時間を過ごしていた。

彼を心配していたノーブルだが、日々仕事は増え続けているため一息つく間もない。未だにウェルと話すこともできなかつた。せめて過(い)しやすいようにと、ウェルに専属のメイドを付け、その世話をさせるより命じはしたのだが、その効果もほどなく無くなつてしまひ。

「その後、ウェル殿が黙つて城を抜け出したと聞いた時は・・・。こう言つてはおかしいですが、さもありなんと思いました。悩んだ末の考へだつたのでしよう。だからこそ私は、お怒りになつた王に寛大な処置をなさるよう進言したのです。それが効いたのかわかりませんが、とりあえずは知らされている自宅の方へ使者を送るといふことで話は落ち着きました。

そしてしばらく時間がたつたかと思えば、ウェル殿の遺体が見つかり・・・」

「ノーベルはそこまで言つと下を向いた。

「私は王が何を考えているのかさっぱり分からなくなつてしましました。勇者が死んだとの知らせが入つた時も、まず王はまだ公にするなどおっしゃいました。民にこのことが広まればいらぬ動搖が広がつてしまつからだそうです。私はそれを信じられないと思いながら聞いていました」

「ノーブル殿はすぐに追悼するべきだと」

ヴェルチンが相づちを打つと、ノーブルは力強くうなずく。

「その通りです。このようなことは早くから民に伝えた方が動搖は広がりません。隠せば隠すほどそれが明らかになつた時の反応も強くなつてしまつのです。また最初に担ぎ込まれた町で、すでにもう

ウェル殿の噂は広まつていきました。いくら口止めしたところで、勇者の死という大きな出来事を隠し通せるわけがないでしょ。

結局噂が広まり、隠すも何もどうじよつもなくなる瀬戸際のところで王は決断されました

「……そうでしたか」

ヴェルチンは腕を組んで考えている。

「あの……そろそろ時間が、ノーブル様」

その時、ずっと黙つて部屋の隅に控えていた部下が言いにくそうにノーブルに言った。

「おお、もうそんな時間になつてしまつたか。申し訳ありません、ヴェルチン殿。これからまた人と会わねばなりませんので……」

言葉通り、心底申し訳なさうな顔であった。

「ええ、ノーブル卿。今口は参考になるお話をどうもありがとうございました。また今度ゆっくり話せる時も来るでしょう。今度は葡萄酒を飲みながら話せるといいですね」

『氣を使つたうえでの発言だった。ノーブルもそれを聞いて、なんとか表情を笑顔に戻す。

「ええ。今度来られる時までには年代物の良い品を用意しておきますよ」

一人で笑い合つと、ヴェルチンは頭を下げ、執務室から退出した

の
だ
つ
た。

7話 仲間たちと。

レピオスとノーブルに話を聞いてきた三人は、いつたん話を整理するため城下町の片隅にある宿に集まっていた。城には自由に入りしていいとの許可をもらっていたので、城の部屋を借りることもできたのだが、わざわざ宿を取つたのはもちろん話の内容があつたからだつた。

この前はたまたまメイドさんしかいなかつたからよかつたものの、今度は誰が耳にするとも限らない。当然この宿でも誰が聞いているか分からぬから小さな声で話せなければならないが、城で話し合つよりはよっぽど気楽であつた。

「聞いてきた話をまとめると、やはり王が怪しいか・・」

「ええ。レピオスさんの話では王が微妙な立場にいたのは間違いないわ。また何かあれば民衆の不満は一気に爆発するかもしれないが、たそうよ。うまくウェルのことを利用して不満をそらしたもの、王の立場は不安定だつたみたいね」

「どうにかして王は民衆の怒りや不満を押さえておきたかった。その点は重要だな。ちょうど窮地にいる時に魔王を倒したとの報告が来たんだろう?」

「ミリアとルニアがうなづく。

「じゃあ二重の意味で王は喜んだろう。その通り、ウェルのおかげでとりあえず状況が落ち着いたんだ。それで味をしめた王はウェルのことをさらに利用しようとした。だからこそ理由をつけてウェルを城に留めておいたんだ」

さんざん理由をつけてウェルを城に引き留めたのは、王が自分の立場を守るためにウェルを防波堤にしようとしたから、でとりあえず間違いなさそうであった。

「あと気になつたのはウェルを診療所に連れてきた奴らだな。死因をはつきり明らかにしろと言つておいて急がせるなんて色々矛盾している。そいつらが自分で判断しているとは思えないから、上の指示だな」

しかし、レピオスのところに連れていくよう指示したのはルーブルであると本人から聞いた。ノーブルが急がせたのだとしたら・・・いや、あんなにもはつきりと死因は分からなかつたと言つことができるだろうか。彼に関するではまだ含んでおいた方が良さそうであった。またレピオスに関しては、嘘をついていることはないというエミリアの言葉を信じることにした。

「しかし分からるのはウェルの殺される理由だ。ウェルに立場を奪われるうんぬんは・・・少し的外れだつたか。そんなことを考える余裕が王にあつたとは思えない」

王の頭はウェルをどう使うかで一杯だつたはずだとヴェルチンは言つた。

「それでね。話を聞いて思いついたことがあるの」

エミリアは新たな思いつきがあるようだつた。

「王の意図に反してウェルは帰りたいと言いだしたわ。もちろん王が許すはずがない。そうしたらウェルが夜にまぎれて出奔してしま

つた。これに怒った王だけ、落ち着いて考えれば、これは逆に使えると思ったんじゃないかしら」

「ん？ どういうことだ？」

「王の最大の目的は民衆からの不平不満を消してしまうこと。そこに間違いはない。そして勇者のおかげで王は最大の窮地を救われたわ。もちろん勇者には感謝していたでしょうが、王はそこで気付いたと思うの。勇者をもつと利用できるはずだと。でもこれから勇者の使い道はどういうものがあつたと思つ？」

エミリアの問いにヴェルチンは慎重に答える。

「いや、それは・・・名誉職に着けるとかな。例えばどこかに領地を譲るとか。それには誰も反対しないだろし、さらに勇者が貴族になつたと発表されれば民衆もまた喜ぶ。命じた王の株も上がるはずだ」

「それももちろんそうね。ただ考えてみて。それは勇者の持つ価値を最大限に發揮していいから。勇者の価値が一番高いのは、魔王を倒したまさにこの瞬間よ。あとは勇者の価値は下がっていくばかり。時間をかけければかかるほど勇者の価値は下がっていく。あんまり好きに慣れない考え方だけね」

そこまでを聞いてヴェルチンにも思いつくことがあつた。そしてまるで信じられないといった表情になる。気付いたようねとエミリアはうなずいた。

「確かにひどい話だと思つわ。私の想像が当たつていいなら・・・王は民衆の考へることを無理やり一つにしてしまつたのよ」

一人の間だけで話が進んでいるのを見て、ルニアは尋ねた。

「二人は何を話しているの？」

Hミリアがはつと気づいたようにルニアを見ると、ルニアに向かって優しく微笑んだ。

「つまり、ね。人は同時に二つのことを考えられないということよ。たった今ウェルが死んでしまえば民衆の考えることは、悲しむにしろいぶかしむにしろ、ほとんどが勇者に対するものだけになるわ。その強い衝撃で王は自分への不満をしばらく忘れせようとしたんじやないかしら」

ルニアは驚く。ヴェルチンが続きを引きとつた。

「突拍子もない話ではあるが、ありえないことじやないな。この前の国葬に溢れるほどの民衆が押し掛けていたのを見た後だからなあさらだ」

民衆の悲しむ声は下を向いていたヴェルチンにも十分聞こえていた。

「しかし、そう考えると・・・。始めに発表を控えたのはウェルの死を隠そうと思つたんじやなく・・・十分にうわさが広がるのを待つていたのか」

うわさが広がれば、民の間には少なからず動搖が走る。それだけでも王のことを考える者は少なくなる。そして十分にうわさが広がり、民衆のもやもやが晴れなくなってきたところで公式に勇者の死を発表する。器の中に燃料をつぎ込み、そこに火を投げ込んだよう

なものだ。

「確かに結果は思う通りになつたな。衝撃が大きすぎて、王への不満は影も形も見えなくなつた。レピオスさんに話を聞くまで、王都から離れていた俺たちは何にも知らなかつたくらいだからな」

しかし、ルニアはひとつ気になることがあった。

「でも勇者が見つかったのは偶然だつたんじやないの？」

ウェルチンは不意を突かれたようにルニアの方を見た。そしてそういえばそうだつたと頭をかく。そこに少し考えたエミリアが答えを出した。

「商人は確かその道を街で聞いたんだつたわよね。その話を商人にしたのはもしかしたら」「

王の息のかかつたものが、わざとウヘルを見つけさせるような道を教えたのではないかとエミリアは言つ。

「どうか。見つけるのは別にその商人じゃなくても良かつたのかもな。その商人が見つけなかつたらまた別の誰かがウヘルを見つけていたのかもしれない」

ウェルチンも同じ考えに至つたようだ。

エミリアの考えは非常によくできていた。未だにきつちりとした証拠はないが、三人は考えれば考えるほどそつとしか思えなくなつてきた。ウェルチンは一つため息をつく。

「実は俺も色々考えてみたんだが、今の話を聞くとただの邪推だったようと思えてきたな」

「何か考えたことがあるの？それも参考になるかもしないわ。話して」

ヴェルチンは一瞬躊躇つたが、まあそれならと話し出す。

「いや、俺はノーブルに会いにいったんだろう？お題目は“勇者のことを聞きたい”だったが、知つての通り俺にはもう一つ確かめたいことがあった。ノーブルが王にどれだけ近いかということだ。過去に話した限りではそんな事を許すはずがないとは思うが、もしかしたらノーブルもウェルの死に関わっているかもしねない」

あまり人を疑いたくはないが・・・とヴェルチンはつぶやく。

「結果的にこちらの考えすぎだったようだ、こういうのはさつき話したな。確かに王への忠節心は持っていたようだが、だからこそその不満を感じているようでもあつたと」

ノーブルは勇者を悼み、また確實にその死を惜しんでいたと、ヴェルチンは思う。それが演技である可能性も捨て切れはしないが、少なくともまるつきり嘘ということはないはずだ。

「それでな。ノーブルと別れた後、俺は彼の部下と少し話をすることができたんだ。その時チラッと耳に挟んだが・・・」

一息ついてまた語りだす。

「俺たちが帰った後、豪勢な宴が開かれたってのはお前たちも聞い

ただろう。そのときの密に隣の國の大臣がいたらしいんだが、それがウェルにいろいろ話しかけていたらしいんだ。それを聞いていたウェルはざいぶん困った顔をしていたらしい。その部下はちょうどそんなところを見かけたそうだ

「隣の国って言つたら・・・あまり私たちの国とは仲良くないわよね。」

「ああ。前に領土問題で少しもめたことがあったな。確か隣の國の方が少しこちらの領土を侵したんだったか？そのときはノーブルが話し合いの席に着いて解決したらしいが、煙は未だに燻っている。で、その時の席で見た顔だったから、部下はそれをはつきり覚えていたらしい」

「実はその大臣が女性であり、部下の好みだったから覚えていたといふのは、一人に言つてもしうがなかつたのでヴェルチンはそこは黙つていた。

「でも、確かに隣の國も魔王の軍勢に脅かされていましたしきう。感謝してウェルに色々話しかけてもおかしくないんじやないかしら。逆にものすごく感謝されたから、ウェルは困つていたとか」

「まあそうかもな。ただ俺は、そいつが自分たちの國に来てほしいとか言つたんじゃないかなとふと思つたんだ」

HIIRIAは想像しない言葉に驚く。

「どうして」

「いや、その時は何を言われたら困るだらうと考えて、たまたま思い浮かんだんだ。王に無理やり引き留められていたつてのが、頭に残つてたのもshireない。しかし今の話を聞いた後だと、ちょっと

それが後押しされたかもしれん。お前たちの話にあったように、王に対する不満は高まつていたんだる。それをほかの国は知らなかつたはずがない。少なくない数の間諜が入つてきているだろ？」

声に出して話すついで、段々とヴェルチンは自分の考えに自信を持つてきたようだ。

「だからウヘルのことを引き抜いて王に対する民衆の不満を再燃させようとしたんじゃないか。そこに隣の国が助け船を出し、干渉のきっかけを作ろうとした。しかしウヘルはそれを断つた。業を煮やしたその大臣は引き抜くのではなく・・・まあ、これだと王が関係なくなつてしまつんだがな」

そこまで言つて、まかすヴェルチンをエリシアは手で制した。

「ちよつと待つて。今のは・・・。あながち間違いとも言えないわ

エリシアは必死に考へる。

「・・・。そうよ。今は思いつく限り原因を挙げていった方がいい。私は、ヴェルチンの考へが間違つてゐるとは思えない。だからどうちもありえるのよ」

つまり、ここで可能性が一つに増えた。

ウヘルは王のための犠牲となつた可能性もあるが、国の併合を狙う隣の国に狙われた可能性もあるということだった。

色々と考えられることは多かったが、いかんせんそれを肯定してくれる証拠がなかつた。結局はやはり証拠を見つけなければならぬい。

今度はそれをどうやって得ればよいのかという話になつたが、ルニアは短い間に色々と話を聞いて、若干疲れてしまつたようだつた。それに気付いたエミリアは少し休憩をしましようと提案した。ルニアとヴェルチンも賛成する。

三人が食堂に行き、早めの夕食を取つていると、突然男が一人外から駆け込んできた。

いつたいなんだと食堂にいる客たちは男を見たが、その男は何ら気にする様子はない。そして食事をしていた三人の顔を見つけるといきなりそのテーブルに走り寄つて声をかけた。

「お食事中済みません、ヴェルチン様、ルニア様、エミリア様。あなたがた三人を王がお呼びです。すぐに城へいらしてください」

忙しないその男はなんと城からの伝令であるらしかつた。

その伝令に急かされるまま、三人は半分食べた食事を残して城へと向かつた。用意された馬車に揺られる三人。その心境は二者二様である。

ヒミリアは自分たちの考えていることがどこからか漏れ、それでは王から呼び出しをされたのではと不安に思っていた。今はそれにどう申し開きをしようか考えている。

ウェルチンはヒミリアと同じようなことを考えていたが、逆にこれはよい機会であるとも考えていた。はつきりとした証拠をどう集めようかと考えていたところだが、むこうからわざわざ自分たちを呼び込んだのである。これまでに調べたことをちらつかせれば、もしかしたら何か王から引き出せるかもしれないと考えていた。

ルニアもどちらかといえばウェルチンに似た考え方である。しかし、二人と違うのは全く王に対して配慮しようと想えていないことであつた。彼女が知りたいのはウェルが彼女と別れた後どうなつたのかということだけである。

実はまだちゃんと一人には話していなかつたが、ルニアとウェルは近いうちにまた会うこと約束していた。

ルニアはウェルに対し好意を持つている。だからこそ旅の最中には、ウェルにいつもくつついていた。ウェルはそれを良いとも悪いとも言わなかつたが、ルニアがそばにいることを嫌がらなかつた。

そして魔王を倒し、王都に戻ってきた後、ルニアはウェルに言った。今度一人だけで会いたいと。

ウェルはルニアの言葉にうなずいた。ウェルも何かルニアに言いたいことがあるようだつた。

しかしウェルは記念式典の後も王に引き留められてしまう。仕方

なくルニア達が帰る時、こつそりとルニアだけを引きとめて言った。

“城から一度家に帰つたら、ルニアに会いに行くよ”と。

ルニアは実家に帰つた後、ウェルが来るのを今か今かと待つていた。しかし、そんな彼女にきた知らせは訪ねて来るはずのウェルが死んだというものであった。

彼女は嘆き悲しんだ。それはウェルの亡骸を目にした時の反応でもわかる。

しかし、話の中でウェルの死に何か裏があるのかもしないといふことに気づいた後は、その悲しみの感情が、ウェルはどうして死んでしまったのか知りたいという感情に変わっていた。それは悲しみに押しつぶされない様にといふ、ある種の防衛本能かもしかなかつた。

ルニアはウェルのその後を知るには王に尋ねるのが一番であると考えていた。一度行こうとした時は一人に止められたが、今回は王自身の呼び出しである。今度こそは王に色々と聞こうと考えていた。三人がそれぞれ考えを巡らす中、馬車は城へと到着した。すぐに王の間に案内される。それぞれが持つていた武器を扉の前に衛兵に手渡すと、三人はゆっくりと王の間へと入つた。

王の間には多くの人間が控えていた。もちろんノーブルの姿も見える。ヴェルチンは先日会つたばかりのノーブルに目礼した。ノーブルもそれに気づき、目礼で返す。その顔は不自然に強張つていた。

ヴェルチンはその顔を見て、これは読み違えたかと不安に思った。

ノーブルは王寄りの人物だつたのかもしれない。ノーブルが何か王に言ったのだろうか？

一瞬後悔したヴェルチンだが、しかししょうがないと腹を括つた。やれることをやるだけだと自分に言い聞かせるのだった。

玉座に近づいていくと、脇からそこで止まるよつて声が飛んだ。三人は立ち止まる。それを見て、王は口を開いた。

「急に呼び出してすまないな。亡き勇者の仲間たちよ。まだ葬儀を終えて間もない。君たちはまだ心の整理がうまくできていないかもしない。しかし、今日は国の急務であるからこそ君たちを呼び出した。してもらいたいことがあるのだ」

部屋によく通るその声に三人は姿勢を正す。どうやら三人が考えていたのとはまた違う理由で呼び出されたらしかった。

エミリアはこの後何を言われるのかと不安ではあったが、同時に安心もしていた。

ルニアは予想と違つた話の流れにきつかけを失い、黙つたままである。

ヴェルチンは心の中でこっそりとノーブルに謝つていた。

王が話を続ける。

「実は、先ほど隣国軍の軍勢が我が領土に侵入したとの報告がきた。その数は五千。全て歩兵だという。我が國が設けている関所を力ずくで突破し、今はその近くの街に攻め込んでいるとの話だ。隣国が何を考えているのかわからないが、私はまずもって街を守るために、軍勢を出すことにした。しかし、編成を整えるのにはまだ

少し時間がかかる。だから今から使者を送り、少しでも時間を持たせたいのだが……。君たちには私が出す使者の護衛をしてほしいのだ」「

してほしい、との言い方ではあるが明らかに命令に等しかった。断ることはできないだろう。代表してヴェルチンが言つ。

「わかりました。出発はいつでしょうか」

「そうか受けてくれるか、ありがたい。出発は出来る限り早い方がいい。準備ができたらすぐ人にやるから、それまで城で待機していくくれ」

王は三人が受けると聞いて一安心したようだ。

それでは準備を行うが良いと言つて三人を下がらせようとする。

「お待ちください。私たちと共に行く使者の方はどうなたでしょうか」

そう言つたのはエミリアだった。

「……ああ、言い忘れていた。この使者はノーブルにやつてもらおうと思つ」

その言葉を聞いてヴェルチンは納得した。さつきノーブルの顔が強張っていたのはこの為だつたかと。そしてまたこの先のことを考え、不安になるのだった。

王の間を出た三人は用意された部屋に行き、出発の準備を整えた。

まづもつて決めなければいけないのは、使者であるノーブルをどう守るかということであった。誰かを守りながら戦うというのは難

しい。ヴェルチン達がいくら戦いに慣れているとはいっても、それはあくまで自分の身だけを守つていればよいという前提の下である。

もちろん仲間が窮地に立てばフォローすることはあるが、それにだって限界はある。ましてやほとんど戦闘などした事がない者を守らねばならないというのは、ある意味専門違いの仕事であった。

しかし、命じられたからにはやり遂げなければならぬ。

三人は考えた末、ノーブルの傍にルニアとエミリアを置いて守り、ヴェルチンは遊撃的な立場を取るようにした。あまりかっちりと役割を決めなかつたのは、少ない人数で守らねばならないから出来る限り役割を流動的にしたいとの考え方からであった。

そうこう話しているうちにノーブルの準備もできたらしく、四人はすぐに出発することになった。

「いや、俺たちの話が王に掴まれたのかと思つたよ」

馬車を運転しながらヴェルチンは言つた。エミリアはそれを聞いて笑い、ノーブルは笑いながらも怒った振りをする。

「まさか私が王に告げ口するとでも思つたのですか、ヴェルチン殿。信じてくださいないとほ、薄情ですな」

ヴェルチンも笑う。

「いいえ、ノーブル卿。あなたがそんなことを言つとは思つていませんよ。

それにまだ葡萄酒をこちそになつていないですからね

葡萄酒とは何のことを言つてこるのかわからず、ヒリコトとルーナーは、きよとんとしていた。

「それはそうと。こんな時期に攻め込んでくるなんて隣の国は何を考えているのかしら」

ヒミリアは氣を取り直して、思つていたことを話す。魔王の軍勢に被害を受けていた隣の国としても、魔王を倒してくれた勇者には敬意を払つてもいいはず。それなのに喪も明けないうちから攻め込んでくるとはどういうわけか。

「やつですね。ウエル殿の葬儀からまだ数日しか経っていません。このような時期を選んで攻めてくるとは・・・」

損得だけを考えるならば、確かに今のタイミングで攻め込むのは間違いではない。なにしろ魔王が倒れたことにより、守りを考えなくて良くなつたのだから。しかし、国には体面と言つもある。こんな時期にじたごたを起こせば、同じく勇者を慕つているであろう隣の国の民衆も黙つてはいなはずなのだが。

「だからこれからそれを確かめに行くんだろ？まあもともと隣の国とは仲が良いわけでもなかつたからな。いつかは起つたことかもしれないさ」

ヴェルチンはそう言ひと馬車の走るスピードを上げた。もう少しで隣の国の軍勢が攻め込んでいたところの街に着く。

まさこちゅうひどくが暮れようとしていた。

8話 H20（後書き）

過去の話をかなり修正しました。新しいものは1-2日以降になるか
と。

「ようこそいらっしゃいました、ノーブル様。そしてその護衛の方々。・・・いえ、勇者ウェル様のお仲間たちと呼んだほうがよろしいかしら?」

一行が通された天幕に入ると、中にいた若い女性が椅子から立ち上がり、開口一番そう言った。

その女性は無骨な防具で身を固める兵隊たちの中で、唯一普段着と言つても差し支えないような服装をしていた。その品も悪くはないのだが・・・しかし、なんとなくいけすかないとエミリアは思った。

ヴェルチン達が攻め込まれた街に着いた時、すでに街は隣国の手に落ちていた。

攻め込まれたとの知らせが入つてから、一行が街に着くまで一週間たっている。奇襲だつたこともあり、防備も満足に整えられないまま戦闘になつたのだからそれは仕方のないことかもしれないなかつた。

しかし街が落ちているからといって、ヴェルチン達は帰るわけにもいかない。一行に課された役目は隣国の軍隊の足止めである。まずは使者として向かうほかはなかつた。

隣国の軍隊は街を制圧していたが、本陣を街の外に置いていた。街の要所要所に人員を配備しているものの、その大部分は本陣の周りを固めている。街の中に兵を置くことで、軍の動きが鈍るのを嫌がつたのかもしれない。

一行の乗った馬車が本陣に近づいていくと、当然ながら見張りの兵から誰何を受けた。

ヴェルチンが馬車の運転席から使者だと伝えると、確認を取るために見張りの兵は本陣の天幕へ走っていく。しばらく待たれた後、許可が出たということで一行は馬車を降り、案内されるまま本陣の中へと入っていった。

またこのような場合、武器を取り上げられるのではないかとヴェルチンは考えていたのだが、案内する兵にそのような素振りは見えなかつた。一悶着あるかもしれないとの不安が解消されてヴェルチンは拍子抜けしたが、ある意味隣国の軍隊がそれだけ陣の守りに自信を持つていても思える。なんとも嫌な感じがした。

しばらく案内されるままに歩くと、ひと際大きな天幕があつた。そこに隣国の大臣が待つてているという。一行は兵に促されるまま、その天幕の中に入つたのだった。

「これはヘレン様。お久しぶりでございます。この前の停戦の話し合いの時以来ですな。前お会いしたときは、次はこのような場でなくお会いしたいのです」と言つて別れたはずでしたが・・・なんとも残念です」

Hミリアの気分がなんとなく伝わったのか、ノーブルは皮肉を込めて言い返した。

それを聞いて、驚いた表情を作つてみせるのはヘレンである。

「あら。わたくしはこの前勇者様のパーティーに出席しましたのよ。そこでノーブル様にも会えるかと思ったのですが、あなた様は少し顔を出されてお帰りになつてしまつたとか。わたくしの方也非常に

残念でしたわ。もちろんお忙しいのですから仕方ないですが

ノーブルの言葉をあつさりと返す」の女性。その名をヘレンと言う。若くして隣国の大臣となつた若手の出世頭であった。もちろんその能力は高い。先日の停戦の交渉でノーブルと負けず劣らずやりあつたことは記憶に新しかつた。

またその顔は特に秀でて美しかつた。傾国の感すらある。白く透明感のある肌に長く伸ばした金髪が良く似合つていた。

天幕の中には、長い机と簡単な椅子がいくつか用意されていた。いくらかのやりとりをした後、お互に机を挟み、向かい合つて座る。ヘレンの後ろには槍を脇に抱えた兵が一人。その何気ないしぐさから、よく訓練を積んだ兵であることが分かる。

またノーブルの後ろには、ヴェルチン達が三人立つたまま控えていた。三人が三人突然襲いかかられても対処できるよう氣を張り詰めている。しかし、そのような役目に慣れないためか少し不格好でもあつた。

それに気付いたヘレンは少し笑いながら言つ。

「そんなに緊張なさらないで。そんなに氣を張らなくとも誰も突然斬りかかつたりはしませんわ。その証拠にあなたたちの武器を取り上げることもしなかつたでしょ？」

どうやら持物を取り上げないよう、ヘレンが兵たちに命令していったようだ。確かに後で襲うつもりなら武器を取り上げようともしないなどありえないが・・・。

それでもその言葉をそつくりそのまま信じるわけにもいかない。多少力を抜いたものの、三人は絶えず気を張り続けた。

その様子を見て、言つても無駄と思ったのかヘレンはあきらめたようだ。椅子に座り直すと、ノーブルの方を向く。

「それではノーブル様。改めてあなた様がいらした理由をお聞きしましよう。・・・まあ大体想像はつきますが」

「ええ、ご想像の通りだと思います、ヘレン様。まずはなぜこのように我が国の領土に攻め込んだのかお聞きしたい。そして、その理由を私がお聞きした後は出来る限り早く街を解放し、我が国の領土から立ち去っていただきたい」

ノーブルは強く言い切ると、これにどう反応するかとヘレンの方を待つた。

ヘレンはこいやかな表情を崩さないまま答える。

「ええ。ではまず攻め込んだ理由についてですね。それは簡単です。こがあたり一帯は我が国の領土であるからです」「

ノーブルはその言葉を聞いて表情を苦いものに変えた。

「ヘレン様。その話については先日の交渉でお互いの合意を得たはずでしょ。この一帯は確かに以前は隣国領土でありましたが、それは百年ほど前の話です」

「この時代、土地の境といふものは自然環境に沿っていた。つまり山の尾根や川などが境界となるのだが、今回問題となっている隣国との境界線は川であった。

古い文献によれば、その昔、川の流れる場所はよりこちうの国側にあつたのだという。この一帯はちょうど川向こちうにあつた土地で、すなわち隣国が支配する土地だったのだ。

しかし、百年ほど前に地殻変動が起こり、川の流れる場所が変わってしまった。その川はより隣国側の近くを流れるようになったのである。

これ幸いとこちらの国の先祖はこの一帯に街を作った。ちょうどその頃、国は隆盛の時期だつたらしく、新しい土地を求める人々は多かった。また反対に隣国は退潮の時期にあつたようだ。そのこともあってか、一帯の土地は問題になつたものの、なし崩し的に国の領土として扱われることになった。

そして先日、意を決した隣国は古い証文を持ちだしてきたのである。かつて自分たちの土地であつた一帯を明け渡すよう要求してきただ。またそれに伴い、軍隊も出していた。

困つたのはこちらの国である。百年もたてばその街に住む者達も三代は変わる。それだけこの土地に根差しているのだ。それを出でいけと言えるはずもない。また元が川のそばの土地だつたため、土はより水分を含んでおり、その開拓は通常よりも困難であった。それを先祖は長い時間かけて土地の改良を行つたのだ。それをいきなり横から持つていかれるのは心情的に納得できることではなかつた。

要求に対する答えは明確である。こちらの国も譲れないものがあった。

それゆえ、交渉は困難を極めた。お互いがお互いに妥協しないのであるから当然である。

その話し合いはいつまでも続くかと思われたが、隣国内に魔王の軍勢が現れることで話は変わつた。隣国は土地に張り付けていた軍を國內に戻さねばならなくなつたのである。もはや土地の問題を話

していいる状況ではなくなっていた。

そのような経緯があつたのだが、ウェルが魔王を倒したことで隣国も今になって余裕ができたようだ。それゆえ問題が再燃したともいえる。

「あの状況でお互いの合意も何もないでしょう。あの時はまず合意する以外に方法はありませんでした。でも今は違います。そう、ウェル様のおかげですね」

ヘレンはまた後ろに控えている三人を見た。その言葉にむつとするルニアである。しかし、なんとか自分を抑えていた。間にはいるのはノーブルである。

「言いたいことは分かりました。しかし、土地の問題については今すぐ答えを出すことは難しいでしょう。もっと正式な場で話し合う必要があります。このような軍人の集まる場所ではなく。その場を設けることに関しては私が責任を持つてお約束します。・・・ですから、街を軍で制圧するなど暴力的な行為を止めていただきたい」

今の時点では出来る提案をノーブルは行つた。それを聞いたヘレンはまた笑う。

「いいえ、ノーブル様。答えはすでに出ています。この土地は私たちのものなのです。これ以上話し合う必要はありませんわ」

「それは強硬すぎるでしょう、ヘレン様」

「そうでしょうか？　そのように感じるのはあなただけかもしれませんよ？」

強い態度に出るヘレンに対し、ノーブルは違和感を覚えた。少なくともこのように話の通じない相手ではなかつたはずだが。そういうぶかしむノーブルにヘレンは気付いたようだ。しかし笑顔は崩さない。

「なぜここのように私が強く出ているのか分からぬようですね」「・・・ええ。ようしければその理由を教えていただきたいのですが」

ヘレンはひと際にこやかな表情を作つた。その笑顔は優越感を漂わせている。

「それではお教えしましよう。私たちがこの土地を治めることは・・・あなた方の王がお認めになつておられます」

物事を根底から覆す一言だった。

「もうわたくし達がこの土地を離れることがありませんので、出でいくよにとの申し出はお断りさせていただきます。

あとそう、街の民に関しては判断を彼らに任せたいと思います。もちろんそのまま残ることも可能ですし、望めば街を出ていくことも許しましょう。まあ、慣れ親しんだ街を離れるものがどれほどいるかは分かりませんが」

衝撃で口を開けないでいるノーブルに対し、ヘレンはさらに続けた。先日の交渉の意趣返しをするかのようにその顔は勝ち誇っている。

ヘレンが気持良く喋っている間、ノーブルは混乱した頭で必死に状況を立て直そうとしていた。

王が土地の所有を認めたとはどういうことなのか。つまり最初からこの土地に関しては自分の知らないところで話し合いか済んでいた?

それなのに使者として自分が送られたということは、どういう意味があるか。諸外国への体面を考えて一応の使者を送った?それとも、自分に細かい交渉をしろといふことか?

様々な考えが思い浮かび、またすぐに打ち消されていく。考えれば考えるほどその意図は分からなくなつていった。

ノーブルが必死に頭を動かしている一方、後ろで控えていたエミリアは一足早くその答えにたどり着いていた。ノーブルとは立場が違うからだった。

しばらくノーブルがどう返すのか見守っていたが、ノーブルがなかなか話しさないことに覚悟を決めたようだ。

エミリアは一步前に出ると、それに気付いたヘレンに対しても言った。

「私たちが来ることをあなたは御存じでしたね。それはそういう意味なのでしょうか？」

ヘレンは口角を上げてみせた。その顔はそのことが事実だと表していた。

最初天幕に入ってきた時に変だとは思つた。なぜただの護衛である自分達を“勇者の仲間たち”と呼んだのか。なぜすでに素性を知つていたのか。すなわち最初から自分達が護衛として送られてくるのは、決められたことだったのだ。

ノーブルもエミリアの一言で気付いたようだ。

「・・・まさか」

ノーブルの顔が蒼白になる。

「ええ。そのまさかです。あなた方が来られることは事前に知らされていました。ノーブル様、ヴエルチン様、エミリア様、ルニア様。あなた方は王に裏切られたのです」

ヘレンの一言は全てを物語つていた。

勇者の仲間たちの疑問はすでに王に伝わっていたのだった。そし

てその動きも掴まれていた。レピオスに会つたことも、ノーブルに会つたことも。

王は必ずしもの問題を処理してしまおうと考えた。そこで思つたのが隣国との交渉である。問題となつていた土地の所有権と引き換えに、一行を片付けてくれるよう持ちかけたのだ。

土地を与えることは損得で言えば損であったが、王としてはまず自分の立場を考えることが最優先であった。土地は奪われたということにすれば民衆の不満もなんとか抑えきれると王は判断した。

隣国にしてみれば願つてもない話である。それほど労力はかけずに土地が手に入るのだ。すぐに軍を整え、動かした。

それはある面からすれば厄介事を一つとも解決してしまう、良い考えであった。自国内に隣国の兵を入れることを考えなければである。違う面からすれば危険極まりない考え方であつた。

もちろん全てが王の思つように上手くいけば問題はない。使者として送られた一行は交渉をうまく行えず、敵陣にて捕まりその命を絶たれた。よくあることだ。また隣国は念願の土地を手に入れ、満足する。これ以上頭を悩ませることはない。

しかし、物事はそう簡単に上手くいくものではない。王は自分から隙を作つた。当然そこに食いつく者たちが出る。そして一度食いついたならばその者たちは絶対に離れない。

「あなたの方の命はわたくしの手に握られています。そりゃの王が言うように片付けてしまつとも難しくありません。

・・・ですがそうしようと思えばこちらにも相応の被害が出てしまいます。魔王を倒した勇者たちのお仲間が相手ですから」

ヘレンの言葉通りだつた。隣国の軍勢は総勢五千人。いくらヴェルチン達が強かるうとさすがに限界がある。囮みを突破するだけならもしかしたら出来たかもしれないが、いかんせんノーブルの存在があつた。守りながら抜け出すことは無理だろう。

ノーブルを見捨てるという選択肢もあつたが、三人にノーブルを裏切ることは出来なかつた。それはもちろんこれまでの関係もあるし、また今後の展開を考えても不可能である。

もし「こ」でノーブルを見捨てて逃げ出してしまえば、勇者の仲間たちは恩を受けた者を見捨てたとして人でなしと扱われてしまう。それは魔王を倒した勇者一行の名誉を辱めることでもあつた。いや、もつとはつきり言えばウェルの名誉を辱めることに繋がつた。それはできなかつた。

「それでです。お互いに物騒なことは止めておきましょ。提案があります」

ヘレンはそこで一息入れると一行の顔をそれぞれ見つめた。各自が異なる表情で見つめ返す。それに笑顔で返したヘレンは言った。

「こちらの国に寝返つていただけませんか？」

隣国は王の願う通りに振る舞つつもりはないようだつた。そしていくらかの土地を奪い返しただけで済ませるつもりもない。

一度優位に立つたならば徹底的に叩いて攻める。奪えるだけ奪う。どこまでも国は貪欲になる。なぜなら国とは集団の欲望が集まつてできたものなのだから。

「まずノーブル様。あなたの素晴らしい能力はわたくしが良く知っているつもりです。その能力をここで散らせてしまうのはあまりにもつたいたい。我が国でその能力を発揮していただければと思います」

ノーブルの顔を見ながらヘレンは言った。誘う表情は淫美と言つていい。場所が違えばすぐに飛びついたかもしないと後ろから見ていたヴェルチンは思った。

ノーブルはその誘いに対し、すぐに肯定も否定もしなかつた。数時間前の彼であれば即座に否定したに違いない。彼の忠誠心は確かだつた。

しかしたつた今、王に裏切られたと知らされたばかりである。そんな彼が裏切つたとして誰が彼を責めるだろうか。彼は悩んだ。

「そしてノーブル様の家族に関してですが・・・。こちらのお誘いに乗つていただければその安全を確保しましょう。城下町に入り込ませている者たちを使い、すぐにこちらの国へ連れてくることができます」

彼には国に家族がいた。忙しくしばらく帰ることができなかつたとはいえ、かれは家族を大切に思つていた。その家族の安全を保証してくれるとヘレンは言つ。そこには脅しも入つていたが。

「そしてヴェルチン様、エミリア様、ルニア様。あなた方はウェル様の仇を討ちたいのではありませんか。こちらの国に来ていただければそのお手伝いをしましよう。

わたくしたちの方でウェル様の死には王が関わっていたという噂

を流させていただきます。そこにあなた方が参加してくれば、民の印象はまるで違つたものになるでしょう。

そのまま上手くすれば蜂起を促せるかもしれません。そうなれば私たちの軍勢も協調して城を攻めます。王は放逐される。その先はあなたの方の思い通りです。いかがでしょう?」

魅力的な提案であることは確かだった。

「この状況からすれば王がウェルを殺したということに間違いはないだろう。証拠を探す必要もなくなつた。目の前の相手がそれを証明しているのだ。しかも予想しない所から援助の手が伸びてきたのだ。それに乗れば自分達の恨みを晴らすことができる。

しかし・・・。

「そうなると民衆に大きな被害が出ます。それについては?」

「民は彼ら自身の考え方で行動を起こすのです。それに関してわたくしが何を言えるでしょう。わたくしができるのは民の行動を支援することだけです」

エミリアの問いにヘレンは苦も無く答えた。

しかし、それは詭弁である。明らかに扇動しているのは隣国であり、ヘレンだ。

脅迫と詭弁を操るヘレンに気付いたエミリアは全てを決めた。未だ誰も答えを出さない状況の中での彼女はヘレンに向かつて話した。

「私たちは確かにウェルの死の真相を知りたいと思っていました。ウェルは尊敬できる人でした。そんな彼が王に殺されたのなら・・・。

私は王を恨みます。王にはしかるべき償いをしてもらひたいとなるでしょう。

ただそこに民衆を巻き込むとなつてくると話は違います。目的のために手段を選ばないので王の振る舞いと同じになつてしまいますから

ヒリアの言葉にヴェルチンとノーブルも目が覚める。

「ああ、その通りだ。例え暴動を起こして王を殺したところでウエルは浮かばれない。いや、俺がウェルに顔向けできない。俺は別に国に忠を尽くしているわけじゃないが……寝返るなんてことはできない」

ヴェルチンにノーブルも続く。

「私もお一人に賛同します。王の罪は私が責任を持つて追究しよ。これでも少しば貴族周りに顔が効きます。王の思う通りにはさせません」

三人の言葉にヘレンは表情を崩さなかつた。

「……そうですか。その考えは変わりそうにない……ですね。分かりました。あなた方を引きこむことは諦めましょう」

やけにあつさつとヘレンは引いた。

「それで……先ほどから黙つておられるルニア様はどうなさるのですか？」

天幕に入つてからずっと黙っていたルニアにヘレンが水をむける。

ルニアは話を聞いてからずっと無表情であったが、声を掛けられて覚悟を決めたようだ。

「・・・私は・・・」

その声にエミリアは嫌な予感がした。

「・・私はウエルの仇を討ちたい。それをあなたが助けてくれるなら・・・私は隣国側につく」

ルニアは仲間達と別れることを決意したのだった。

「・・・ただしもう一つ条件がある。この場から私以外の三人を安全に帰すこと。それができないのなら私はあなたたちに手を貸さない」

ルニアはそう付け加えた。有無を言わせない声であった。エミリアはそれを聞いて、もしかしたらこの場を乗り切るためにルニアは自分が犠牲になろうとしているのではないかと思つた。いやそう思いたかつた。だからこそ言つ。

「ルニア、あなたが犠牲に・・・」

「違う！」

ルニアはエミリアに向かつて手を突き出し、エミリアの言葉をさえぎつた。

エミリアは突然大きな声を出したルニアに驚く。

「私は・・・私は本当にウェルの仇を討ちたいの。そのために出来ることなら何だつてする。例え仲間を裏切ることになったとしても。ウェルは私にとつて大事な人だったの。でも王は彼を殺した。私は許せない」

それはルニアの本心であつた。最後に交わしたウェルとの約束。それを永久に叶わなくしたのは王だ。どうしても王は許せなかつた。この手で殺してやりたいと思つた。そして今日の前にそれを実現できる手段がある。彼女はそれに手を伸ばした。

そんなルニアを見るエミリアはただただ悲しそうな顔をしていた。

一方で、その感情は分からなくもないとヴェルチンは思った。だからこそ、ヘレンの申し出を受けたルニアを、幼い子供のような考え方だとただ切って捨てるにもしなかった。しかしだ。

「ルニア、ウェルは今のお前をどんな目で見るんだ?」

ルニアを止めないわけにはいかなかつた。それが仲間であり、ウェルがいない今のこのパーティでのヴェルチンの役目であつた。だが、ルニアは冷たく答える。

「・・・ウェルはもういない。これは私の問題」

その言葉を聞いてすぐ、ヴェルチンはウェルの葬儀の前夜を思い出していた。その時の自分の言葉も、ルニアの泣いた顔も。あの時とはまるで逆である。まさかこんな形でルニアがウェルの死を乗り越えることになるとは思わなかつた。

いや、もしかしたらウェルの死を受け入れられていなかつたのは自分の方なのか。自分がヘレンの申し出を断つたのは、ウェルの名譽を考えてのことだ。だがルニアの言うようにウェルはもうこの世にいない。“その後”のことを知るすべはない。

ウェルの名譽がどうこうといつてこいつのは、あくまで“その後”を生きる自分たちの考えることだった。もう彼は自分の名譽について意識などしない。いや、しようがない。しかしヴェルチンは自分の頭にウェルの像をつくりあげていた。その架空の像がどう考えるかを意識していた。悪く言えば言い訳の材料のように使つていた。

ルニアは一歩そこから抜け出した。いないウェルがどう思つかな

ど考えない。はつきりと自分の明確な意思を示したのだ。彼女は少し前にヴェルチンが望んだように、その死を受け入れ、乗り越えていた。

ルニアの一言の後はしばらく場に沈黙が続いたが、それをヘレンが打ち消した。

「それではお話も済んだようですし、先ほどの条件も踏まえてこちらの考えをお伝えしましようか」

まるで何事もなかつたかのよつた声であった。

「ルニア様のおっしゃつた条件。それは受け入れましょう。・・・
といふか、最初からそんなつもりはありませんでしたけれど」

ノーブルが何か言おうとするがヘレンは気にせず続ける。

「前に言つたよつにこちらもあまり被害は出しありません。これからが大変ですかね。あとは・・あなた方が私たちにとつてもうあまり障害にならないからです」

確かにその通りだつた。王が彼らを裏切つたことをヘレンは伝えた。どうしてその後に彼らが王の手助けをするだろう。この後彼らが積極的に動くとしたら、きっと隣国が望むような方向に事態を持つしていくはずだ。どうなろうと國は混乱する。そこを隣国は上手く立ち回ればよい。

すなわちヘレンの申し出を受けようが断つが、もう選択肢はそれほど残されてはいなかつたのだ。

「まあ誰もこちちらに手を貸してくださらぬようでしたら分かりませんでしたが。お互に助かりましたね」

性質の悪い冗談だつた。

「それでルニア様以外のお三方。あなた方に關してはお乗りになつて来られた馬車まで兵をお送りします。それでこの陣から離れていただければよろしいかと。ただ・・・今後はどうされますか? こちらとしては逃げられたとも、望んだままにとも王にお伝えできますが」

ヴェルチンは答えた。

「好きなように伝えてくれ」

「そうですか。それでは・・全て片付いたと伝えておきますね。どうせ城には帰らないでしょうし、お互に少しでも時間を稼いでいたほうがいいはずです」

王は一行が自分の情報を握つていると知らない。もし逃げられたと伝えれば城に帰ることはできるだろう。しかし使者としての失敗を責められる。立場は難しいものになるだろうし、行動の制限もつく。最悪のことを考えれば、身の拘束やそれ以上のこともあります。

じつはなればヴェルチンたちは逃げるほかないだろう。そして今後のことを考えるために時間はあつた方がいい。またヘレンたちも噂を流して暴動を起こすよう準備の時間が必要だ。

そこまでを考え、ヘレンは片付けたと伝えることを決めた。彼らが死んでしまったなれば王もいったんは落ち着く。少しほとんど時間が稼げるだろう。

またヴェルチンもヘレンがそこまで考へるだらうと予測してそう言つたのだった。

「ほんからは以上です。それではルニア様は今後のことをお話しうるのでここに残つてください。あとほんがお送りしますので」

ヘレンがそう言つて後ろの兵に合図すると、後ろの兵が懐から鈴を取りだして鳴らす。すると天幕の入り口から兵が入ってきた。それを機に、すでに覚悟を決めていたノーブルやヴェルチンが立ちあがる。しかし下を向いているエミリアだけが動かない。

ヴェルチンがエミリアに近づいていき、肩をたたいた。エミリアは顔を上げてルニアの方を向く。その目は涙目だった。その一方、ルニアはエミリアに見つめられていることを自覚しながら、あえてそちらを向かずにいる。エミリアの顔を見てしまえば、彼女の決意は崩れてしまいそうだつたのかもしれない。

しばらくルニアの横顔を見つめたエミリアは、また正面を向くとぎゅっと目をつぶった。そしてすぐに目を開ける。その時にはもう目に涙はなかつた。そして立ち上がる。ルニアに一言もかけることなく入口の方へ歩いて行つた。

それにノーブルが続く。彼は一度ルニアの方を向くと頭を少し下げた。そして歩き出す。彼も一言もルニアに声をかけなかつた。

最後に残つたのはヴェルチンだ。彼もノーブルに続いて天幕から出ていくとする。しかし天幕から出でていこうとする直前、彼は立ち止まると振り向き、ルニアの後ろ姿に向かつて言つた。

「お前はさつき仲間を裏切つてもと言つた。だけど俺たちほどん

なことがあらうとずっと仲間だ、ルニア」「

ヴェルチンは出ていった。続いてヘレンの後ろに控えていた兵たちも出ていく。ヘレンが命じたのだった。そうして残つたのはヘンとルニアだけになつた。しかしそくにヘレンは席を立つ。

「先ほどはああ言いましたが。今後のことについてはまた後で話しましよう。今あなたとお話するのは無理でしょうから」「

一言そう言い残すと、ヘレンも天幕から出ていった。そうしてルニアは大きな天幕に一人きりになつた。

外に出たヘレンは、ルニアが出てくるまでその天幕に誰も近づかないよう兵に命じた。彼女にも人としての情はあるようだった。そして結局、その日は誰もその天幕に近づかなかつた。

11話 大臣と。3（後書き）

一気に書いたもののキャラの性格等々に一貫性がない気もしてきました。後で読み直して修正できるところは修正します。

青く晴れた空の下、暖かくなつた日差しは春の訪れを示していた。

少し道を歩けば、いくらでも野に咲く花を見つけることができるだろう。そしてその近くで舞う美しい蝶々も。春の穏やかさは、生きとし生けるものすべてに優しかつた。

またその優しさは、厳しい寒さをなんとかやり過ごした後だからこそ、殊更に感じられるようであつた。

魔王を倒してから数ヶ月後、ウェルはやっと我が家に帰ることができる。

長く空けていた我が家は手入れのされていない庭の見た目と相まって、まるであばら家のようにになつていた。家の中に入つてみれば、中は風雨にこそ晒されていないものの、ベットは埃にまみれており、天井にはクモの巣が張られている。

思わず、ため息をついた。

魔王を倒すといつ大仕事を成し遂げ、面倒なこともやり過^{ハシ}り・・・いや正確にはやり過^{ハシ}せてはいけないのだが、やつとのことで我が家に帰ってきたのである。まずはベットにでも横たわり、ひと休みしたいといひのであった。

それなのに我が家はこの有様だ。掃除をしないと、今晚寝ることも適わないだろう。

家に帰つてきて、まざしなければならないのが掃除であったとは。ついしかめ面をしてしまつ。

しかし、何を思ったといふで、自分が動かないと何も始まらない。仕方ないと一言つぶやき、軽くほこりをはらつた棚に荷物を置くと、すぐに掃除し始めたことにした。

何にしろまずは、川に水を汲みに行かねばならない。ウェルはほこりだらけの家の中から大きな甕と木桶を持ち出し、近くの川へと向かつた。

ウェルの住む家は人里からだいぶ離れた場所にある。だから道端で人と会つことはなく、当然目を惹くようなものもない。たまに鹿やウサギを見かける程度である。

そのような場所であるから、ウェルが川へ向かう時は考え方をしながら歩くことが多かった。今はこの数ヶ月間のこと思い返している。

ウェルとその仲間は魔王を倒した後、乞われて王の城に滞在していた。

当初、彼らは王に魔王を倒したと報告すると、早々に城を立ち去るとした。しかし王はそれを引き留めた。記念式典があるからと。まあ、記念式典くらいは仕方がないとウェルは思った。それで一区切りにはなるだろう。

しかし話は終わらなかつた。

次は、魔王討伐を記念した祝賀パーティーが開かれることだ

つた。また開催まで少し時間がかかるとも、城で待機していくほしいという話だった。

マイトたちは一度家に帰してほしいとはっきり王に伝えた。しかし王は、それは出来ないと語る。

ウェルとしても自分たちのために聞いてくれるパーティーへの出席をあまり無下に断るのは難しかった。それでもウェルは食い下がつた。仲間を家に帰すという、ある種の責任を感じていた。

そして王は遂に折れる。ウェルが残るのであれば、ほか三人は帰つてもいいということだった。

もちろん仲間たちは自分たちだけが帰るわけにはいかないとウェルに訴えた。最も強く主張したのはルニアであった。

しかしウェルはそれを断つた。なぜなら皆には家族がいる、家族がないのは自分だけだからと。

そのウェルの一言で仲間たちは何も言えなくなつた。気まずくなつたからではなかつた。ウェルの優しさを感じたからだつた。

結局三人はその後すぐに城を出た。城を出ていく三人のうちルニアだけが何度も振り返る。ウェルはその姿が見えなくなるまでずっと手を振つていた。

祝賀パーティーにおいても、ウェルはまるで見世物のようであつた。次から次へとあいさつに来る来賓たち。一人ひとりの話が長いので相づちを打つだけでも疲れる。疲れた顔を見せないようウェルは気をつけていた。

そんな中、今度は一人の女性がウェルの前に立つた。若くして隣国の大臣となつた女性だといふ。来賓は年配の男性が多くつたのでその姿はとても目立つっていた。

その女性は他の来賓客と同じようにウェルを称賛した。そしてウェルに近づくとその手を掴む。そしてゆっくりとウェルに顔を近づけた。

ウェルは突然のこと驚いたが、掴まれている手を振りほどくわけにもいかない。そしてその女性の顔がウェルの顔に触れそうになり、止まった。

そうして彼女が呟いたのは、隣国でもその力を示していただけませんかという誘いの言葉だった。

そんなことを思い出して川に着いた。太もも辺りまでしか水の来ない、それほど深さのない川である。

マイトは川岸にいつたん木桶を置くと、甕を担いで、川の中へざぶざぶと入つていった。

いちばん深い所まで進むと、直接甕を川の中に突っ込んで水を汲む。すぐに甕が満杯になった。

満杯になつた甕を持ち上げ、陸へあがる。

水をこぼさない様に静かに甕を下ろすと、そのそばに座り込んだ。

暖かな日差しの下で、水面を眺める。ゆつたりと水の流れる川の表面には、久しづりに見る自分の顔が映つていた。

黒く、短い髪をした一人の青年。こう言つてはなんだが、どこに

でもいそうな顔。

唯一人と違うと言えば、彼にはその左耳の下辺りに小さな痣がある。生まれつきある痣。

幼い頃は、その痣がどうも見苦しいと一人悩んでいた。

当然のようすに近所の子供たちからはからかわれたし、自分でも気にしている分これが原因で喧嘩になることも多かつた。まあ今ではもう懐かしい笑い話だが。

さて、ここで座っていても物事は始まらない。そろそろ終わりにしよう。動き始めないといけない。

川から帰ってきたウェルはそのままの流れで家の中を掃除し始めた。

まずは天井に張っているクモの巣を棒でからめ捕る。取りきれない部分は棒の先に布を巻きつけ、天井に押し付けるようにようにして取つた。すぐに布は真っ黒になる。それを先ほど汲んできた水でじゅぶじゅぶと洗うと、今度は家の埃を掃うこととした。

棚の上や机の上、ベット、床と高い所から順に埃を掃っていく。埃が舞い散るたびに鼻がぐずつたが気にしない。快適な生活のためには掃除は必要だ。たまにくしゃみをしながらウェルは埃を掃い続けた。

とはいっても、ウェルはまたすぐ家から離れるつもりだったので本當は最低限の掃除でいいはずだった。何もそこまで熱心にすることでもない。しかし、彼は掃除を一度始めてしまつと止められないであつた。その後もウェルは家の掃除を続けた。そして最後にベットのシーツを新しいものに変えたところでやつと掃除は終わつたのだった。

掃除を終えて、ウェルは一仕事終えた満足感を味わつていた。
しかし、だいぶ時間も経過している。まだ日が暮れるには早いものの、さらにやることがある彼は急がねばならなかつた。
台所に行くと、先ほど汲んできた水で手洗いやうがいをする。そして今度は夕飯の調理に取りかかつた。

食材はさつき川に行つた時ついて捕つてきた魚だ。木桶に何匹

か入っている。魚を捕まえるのはウェルの得意なことの一つであったが、今回は時間がなかつたのでビリッと楽な手を使つてしまつた。まあまた今度自力で捕まえる機会もあるだろ？

また調理と言つても今日は塩をふつた魚を串にさし、火にかざして焼くだけであつた。単純ではあるがだからこそ味わいもある。ウェルの祖父は魚をそうやつて食べるのが好きであった。もちろんそれを見て育つたウェルもだ。

ウェルはすぐに焚き火を起こした。その火力は意外に強い。しかしあまり強い火で焼くと表面だけが焦げてしまい、その魚は食べられたものでなくなつてしまつ。時間はかかつてしまつが仕方がない。彼は火から少し離れたところで魚を焼きはじめた。

魚が焦げないよう気を回しながら、ウェルはまたその時のことを見出していた。

その女性はずつとこやかな表情を崩さなかつた。しかしその表情の裏で何を考えているのか。ウェルはそのざらつくような、微妙な感覚を感じ取つていた。

どうやら彼が望まないままこの場にいることをその女性は知つてゐるようだつた。それを知りつつ、誘いの言葉を吐く。何も知らない者ならば、单なるその場だけの冗談のようにも聞こえただろう。しかしウェルだけには分かつた。その言葉の裏に何か意味を込めているのが、だからこそ困つたのだった。

ウェルが困つているのを見た彼女は、その笑みを濃くした。そして顔を引く。それではまた後でと言うと彼の側から離れていつた。

なぜ何も答えを聞かないうちに彼女が離れていったのかは分からなかつたが、とりあえずウェルは圧迫感から解放されて息をつく。

そしてすぐに彼女はどういう意味で誘ったのか、まずはそれを考えなければいけないとウェルは思つた。しかしながら来賓客は数多く控えている。なので一旦、その考えを頭の隅に追いやつたのだった。

魚が焼ける頃には日も傾きはじめていた。急がなければならぬ。ウェルは焼いた魚を数匹抱えると、家の裏山を登つて行つた。

もともときちんと舗装されていない道は、長く誰も立ち入らなかつたために少しばかり歩くのに難儀したが、それを気にすることもなくウェルは山を登つていく。またその途中で見つけた花を何本か摘んだ。また先に綺麗な花が咲いている木の枝も一本折つて一緒にもつていく。

小さい山なのでそう時間もかからぬうちに、頂上に着いた。頂上は周囲の木が切り倒されており、開けた場所になつていて。よく日が当たるので周りの草は伸び放題であったが、ある一角だけは小石が敷き詰められているためほとんど草が生えていなかつた。ウェルはそこに向かって歩いていく。その一角にはウェルの父と母、そして祖父の墓があるのだった。

ウェルは墓の前に立つと、しばらくの間じつとしていた。立つまま墓を見つめる。そして今までの思いをはせることで、やつと家に帰ってきた実感が湧いてきたのだった。

「ただいま」

そう一言つぶやくとウェルは持つてきたものを墓の前に置いた。母の墓にはさつき採ってきた花を。父と祖父の墓には焼いた魚を。

普通に考えれば、母には花束を持つてくるべきだったし、父や祖父にも魚などではなく、もつと違うものを持つてくるべきだとは分かっていた。しかし魚と花は、祖父がまだ生きていた頃、自分と二人で両親の墓参りに来た時に祖父がいつも持つてくるものだった。

どちらも両親が好きなものだったんだぞと祖父は言った。ウェルはあまり記憶になかったが両親はウェルを連れて祖父の家に来るたびに、周囲に咲く花を愛で、またその魚料理に舌鼓を打つていたといつ。

成長するに従い、実際は祖父が自分の好きな料理を振る舞つていただけなのではないかとウェルは思うようになったが、しかしもうこの一つを持つていくことは習慣になっていた。そして祖父がいなくなつた後は、持つてくる魚の数が一匹増えた。

持つてきたものを全て墓に置くと、今度は墓周りの掃除をすることにした。掃除と言つても落ちている木の葉などを取り除いたり、撒いてある小石の隙間から生えている草を引き抜くくらいの簡単なものである。しばらくウェルはその作業を続けていた。

祝賀パーティーが終わった時、ウェルは一安心していた。これでやつと帰ることができる。パーティで誘われたことは気になつてはいたが、一度家に戻りたかつたし、ルニアとの約束も果たさなければならなかつた。

だからこそすぐにウェルは城から離れようとした。しかしました王

に止められる。

正直に言えば、ウェルは内心怒っていた。無理矢理城から出でていってやうとも思った。ただ同時に、何か変だとも思っていた。明らかに自分を城に留めていようと言つ意思が感じられる。

もしかしたら彼女の言葉と何か関係があるのだろうか。何か自分の知らないところで動いているものがあると感じ、ウェルは不安になるのだった。そのこともあり、しばらくはまた城で過ごすことをウェルは選んだ。

しばらくすると自分に専属のメイドさんがついた。それまでは毎日入れ替わりで違うメイドさんが自分の世話をしてくれていたのが、改めて専属のメイドさんがついたことでやはり王は自分を城から出すつもりがないのだなと強く思った。

世話をしてくれているメイドさんは何も知らされてはいないのだが。その献身ぶりは裏に何も感じることが出来なかつた。彼女に含むものは何もない。仲間たちがいなくなつた後、信頼できる人間となかなか話すことができなかつたウェルは唯一彼女との会話を楽しんだ。自分の話を聞いて口々口々と笑ってくれるメイドさんと話すのはとても気が楽だつた。

そうして幾日かが過ぎた夜のことである。自分の部屋を訪ねてくる人物がいた。

ドアのノックの音に、最初はメイドさんが訪ねてきたのかと思った。しかしすぐに違つと氣付く。ノックの仕方がいつもと違うのだ。どうやらドアの向こうにいるのは男性のようだつた。

どうぞと声をかける。するとドアが開き、見覚えのある男が部屋の中に入ってきた。

「こんばんは、ウェル様。夜分遅くに失礼をしてすみません」
「いえ、とんでもないです。こんばんは。・・・えーと、あなたは
確かノーブル様の部下の
「ベトレイです、ウェル様」

訪ねてきたのは、ノーブルの部下で腹心のベトレイであった。

勇者の仲間たちが隣国に攻められた街に使者として向かつてから、三週間が過ぎていた。

噂によれば、彼らは卑劣な隣国の手にかかり、捕えられその命を奪われたといつ。まだ民衆にその情報は伏せられていたが、レピオスは一日に一度巡回して回つてくる兵にそれを教えられた。その兵は隣国に激怒していた。言つながら驕し討ちのように彼らは殺されたのである。

しかし、交渉が失敗して使者が殺されるというのは確かにないとではなかつた。だからこそ勇者の仲間たちが護衛に付けられたのだが、彼らでも無理だつたのかとその兵は言つた。

使者に続き、王は急いで集めた軍勢を送つたがその軍勢が到着したとき、すでに街は隣国の手に落ちていた。また隣国は街の外に陣を敷いており、こぢらを牽制していたそうだ。しばらくの間両軍は対峙したが、結局戦闘は起こらなかつた。街が落とされていた場合、そのまま戻つてくるよつこと將軍は王から厳命を受けていたからであつた。

もちろんこの判断はあとで問題になつた。助けに行つたはずが一戦も交えずに退却してくる。何のために行つたのか分からぬないかと。

しかし王はそれを撥ねつけた。一度街が落とされてしまえば、さらにまた取り返すのは難しい。兵にも被害が出る。またよしんば街

を取り返せたとしても逃げる敵軍は卑劣にも街に火を放つていいだろ。それでは街に残る民の安全が保障されないと。

だがこれは理由になつていなかつた。 『 』 うなるかもしないと悪い方の可能性だけで物事を否定していくには何も始まらない。 判断は損得を秤にかけてからすべきことであつた。 ましてや前のこともある。 王はまた同じ過ちを繰り返そうとしていた。

しかし、 そんな王を否定する者は出でこなかつた。
仕方がないことだとレピオスは思う。 誰だつて自分の身は可愛いものだ。

それに、 もしそんな者がいたならば、 自分はこんなところにいな
いだろう。

彼はいま自分のいる部屋をぐるりと眺めた。 そこは日光も入らず、
ただ口ウソクの灯りだけがともされてゐる。 今が昼なのか夜なのか
すら分からぬ。

彼は城の地下牢に閉じ込められていた。 王に対する不敬の罪がそ
の理由だった。

診療所に乗り込んできた兵によつて城に連れて来られたかと思え
ば、 いきなりレピオスは地下牢に放り込まれた。 年寄りをこんな風
に扱うな! と怒鳴つたが、 兵の誰も気に留めなかつた。 そしてその
まま彼は放置されることとなつた。

彼の入れられた牢屋は木材で周りを囲んだ狭苦しいものであつた。
牢屋の中には、 一か所地下水の流れるところがあるほかは何もなか
つた。 初めてそれを見た時はなぜ唯一こんなものがあるのか分から
なかつたが、 しばらくしてその意図が分かつた。 どうやらトイレの
代わりらしかつた。

また食事に関しては、粗末なものが日に一回配られた。最初は誰がこんなものを食べるかと思い、口をつけずにいたが、次第に襲ってくる空腹にレピオスは勝てなかつた。結果、彼は冷めたスープを飲みつつ、絶対にここから出ると強く決意したのだった。

牢に入れられてからどれほどたつただろう。食事の回数を数えていたが少なくとも一週間ほどはたつているはずだ。しかし牢獄に叩き込まれてから状況にほぼ変わったことはない。

レピオスはまず健康だけは保たなくてはならないと思い、軽い運動を繰り返していた。

とりあえず、気付いたことはあつた。この牢屋の近くにもう一人捕えられている人物がいることだ。食事を持つてくる兵がいつももう一人分の食事を持つていることで気付いた。男か女かは分からないが自分と同じような理由で捕えられているのかもしれない。

おそらく自分が捕えられた理由はウェルに関することだろう。最近変わったことと言えば、エミリアたちが訪ねてきたことしかなかつた。そして自分を地下牢に放り込んだということは、エミリアの言つていたことが事実だと証明しているとレピオスは思つた。

そこまで考えて、彼は勇者の仲間たちの無事を祈つた。自分がこのような目に合つているからには彼らもまた危険な目に合つているだろ。特にルーニアのことを彼は心配していた。まだ幼さを残している女の子だ。大それた力を持っていてもその精神はまだ未熟である。このような環境で彼女は耐えられるだろうかと。

ある意味レピオスは彼らに巻き込まれたともいえるのだが、全く恨んでいる様子はないようだつた。

また少し状況が好転したと言えるのは、少しばかりではあるが外の情報が入ってくるようになったことだ。牢の巡回をしている兵が外で起こった出来事を伝えてくれるようになったのである。

その兵にとつては多分暇つぶしのようなものなのだろう。変わり映えのない仕事に飽き飽きしていた彼は、何を話しても差し支えのないレピオスに色々愚痴を話して時間をつぶした。レピオスは仕事柄人の話を聞くのに慣れているので、どうやら気持良く話すことができるらしかった。

しかし、その話の中でレピオスは勇者の仲間たちの話を聞いた。どうやら想像した中で一番最悪のことが起こったようだつた。兵が去つていった後、彼は涙を流した。誰にも見られる心配がないのもあり、それは次第に嗚咽を交えてのものになつた。

意氣消沈したレピオスはそれからといづもの食事にもあまり手をつけなくなつた。巡回の兵が心配してこつそりと差し入れをしてくれることもあつたが、それすらレピオスは手にしなかつた。

そうして一週間が過ぎた頃である。頬がこけてきたレピオスが横になつていると、遠くの方でどたばたと物音がした。

何か起こったのかとレピオスは身を起こす。次第にその物音は近くなつていった。最後にどんと大きな音がしたかと思うと、誰かが走つてくる音がする。

その足音の主は牢を一つ一つ確かめながらこちらに向かっているようだつた。そしてレピオスの牢の前まで来た。ロウソクの灯り

ではっきり確認できないが、その姿には見覚えがある。

「・・・ヴェルチン様・・・？」

その声を聞き、牢の前に立つ男はほっとした表情をした。そして走ってきた方向に向かつて叫ぶ。

「ここにいるぞ！」

するとまた誰か一人こちらに駆けてきたようだ。そうしてレピオスの牢の前に現れたのはほかでもない、エミリアであった。

「レピオスさん！・・・良かつた・・・」

エミリアは心底ほっとしたようだ。しかし一方、レピオスはエミリアを見て驚いた。

「エミリア様、その頭は・・・」

エミリアのトレーデマークであつた長く綺麗な髪がぱつさりと切れている。肩に少しかかる程度までに短くなっていた。

「え？ああ、これは・・・」

「そういう話はまた後でだ、すぐにここにから出るぞ！」

ヴェルチンはそう言つて一人を急がせた。そして腰から剣を引き抜くと、剣首の部分を牢にかけられた鍵に叩きつける。すぐに鍵は壊れた。牢の扉を開けると、ヴェルチンが中に入ってくる。

「すぐに動けますか？」

レピオスはそれに頷くとふと思いついたことを言った。

「隣にも自分と同じような理由で捕えられた人がいます。その人も助けてあげられませんか」

その言葉にレピオスは後ろを振り向いた。エミリアが頷き、隣の牢へと走つていぐ。その間にレピオスは立ちあがり、ヴェルチンに手を取つてもらいながら牢の外へと出た。久しぶりに動いたので多少はふらついたが、少しは運動していたかいがあるようだつた。まづ問題なく動ける。

するとエミリアがヴェルチンを呼ぶ声が聞こえた。どうやら手を貸して欲しいらしい。ヴェルチンとレピオスは急いで隣の牢へと向かつた。

隣の牢では鍵を壊したエミリアが中に入り、そこにいた人物を介抱していた。中の人物はどうやらすぐには動けないほど衰弱しているようだ。ヴェルチンを呼んだのは彼におぶるよう頼むためだつた。

ヴェルチンはすぐに牢の中に入つた。そして介抱されている人物の前でしゃがみ、背を向けておぶろうとする。そして後ろを振り向いて声をかけた彼は、その顔を見て驚いた。

牢の中に捕えられていたのは、あのメイドさんであつた。

メイドさんを見て驚いたヴェルチンであつたが、今はそんな場合ではない。彼女を背負うとヴェルチンは牢の出口へと走った。それにレピオスとエミリアも続く。レピオスはたまによろけたりしながらも、エミリアに助けられながらなんとか走り続けた。

道の途中、レピオスは数人の兵士が倒れているのを見つけた。その中によく自分に話しかけていた兵がいるのを見つけ、思わず彼にかけよる。しかし心配するほどのことではなかつた。どうやら気絶させられているだけのようだ。一安心したレピオスだが、すぐに後ろからエミリアの声が飛んでくる。

「何をしているんですか！早く！急いで！」

エミリアの声に急きたてられながら、レピオスはまた走りだした。

そのまま地下を脱出した彼らであつたが、なぜか彼らは城の外に向かわず、城の中のある一室に隠れていた。どうやら地下牢でのごたごたはまだ表れたになつていよいようだったが、そのうちレピオスらがいなくなつたと気付く者も出るだろう。このままではいざれ見つかってしまうとレピオスはヴェルチンとエミリアに訴えた。

しかしヴェルチンたちはレピオスに向かつて頷くだけで、一切慌てた様子がなかつた。むしろ何かを待つているようだ。

すると遠くの方から喧騒の音が聞こえてきた。ついに自分がいなくなつたとぼれてしまったのか。レピオスは焦つた。しかしこの人は反応しない。その反応のなさにレピオスがまた声をかけようと

したその時、潜んでいる部屋のドアがふいにノックされた。
すぐに三人は身構える。こうなつては逃げ場はない、もはやこれまでかとレピオスは覚悟を決めた。

ノックの後、すぐにドアが開く。しかし予想と違つて部屋に入ってきたのは男が一人であった。

「（）無事でしたか？」

「ああ」

男の言葉にヴェルチンが答える。その反応から見るに、どうやら男は（）ちらの味方のようだ。

「手筈通り、あなた方を城から出します。ついてきてください」

レピオスは緊張で止めていた息を一気に吐き出した。

その後彼らは上手く警備の隙を突き、城を抜け出すことができた。先ほどの騒ぎはヴェルチンたちを連れだした男が仕掛けたことのようだった。

城から出たところでその男とは別れた。彼にはまだやることがあるらしかった。

すぐにヴエルチンたちは取り決められていた場所へと向かった。

ノーブルが信頼のおける人物だと言つた貴族の屋敷であつた。そこは彼らが戻ってきた時から世話になつてゐる場所もある。

ノーブルたちが人目を避けながら屋敷を訪れると、その貴族は彼が生きていたことを単純に喜んだ。すでに引退した身であったが、

事情を詳しく聞くこともなく彼らを匿つたのである。さすがノーブルが信頼していた人物であった。

そして今、屋敷ではノーブルがまだかまだと心配しながら待つてゐるはずだ。彼らは急ぐ足をさらに速めた。

すでに夜もだいぶ更けた時間であつたので、向かつ途中で人と出くわすこともなかつた。また地下牢から出たばかりのレピオスは、あまり明るい所で目を開けられていられなかつたのでそれにおいても都合が良かつた。間もなく彼らは目指す場所に到着した。

「ベトレイが上手くやつてくれたようですね。良かつた・・・」

ヴェルチンたちを迎えたノーブルは胸を撫で下ろした。

「ええ。特に何も問題はありません。むしろ警備がざるで逆に怖かつたですが」

「それも彼が手をまわしたのでしょう。どうやつてかは分かりませんが、兵の数を減らしたのだと思います」

彼が味方で良かつたとノーブルはつぶやいた。

この屋敷に世話になり始めてすぐのことである。これからどうすべきか三人が考へていると、レピオスが王に捕えられたとの知らせが届いた。すぐに自分たちのせいだと気付いた彼らはレピオスを助け出すことを決意する。しかし、いかんせん城に忍びこむ方法がなかつた。

彼らは悩んだ末、ノーブルの部下のベトレイに連絡を取ることにした。どこから自分たちの情報が漏れるか分からぬいうえ、敵味方

もはつきりしない状況だ。ある意味で賭けであった。

連絡を受けたベトレイはすぐに彼らのいる屋敷へやつてきた。そうしてノーブルに会うと涙を流してその生存を喜んだ。それを見て、彼らはベトレイが味方だと確信する。すぐにレピオス救出のための話し合いが行われた。

その結果、レピオスは助け出され、また偶然ではあつたが、あのメイドさんも助け出すことができた。彼女は衰弱していたが命に別条はない。成果は上々だった。

「・・・いや、もちろん私はヴェルチン様やエミリア様がそれほど簡単に死ぬわけがない、と思つておりました。あとはもう少しだけ早く来てくれば言つことなじだつたのですが」

助け出されたばかりだといふのにレピオスはそう軽口を叩いた。エミリアは笑いながら言葉を返す。

「それは悪かつたわ。でも少し体が細くなつたんじゃない？お腹もへつこんでちょうど良くなつたかもね」

ヴェルチンとノーブルも笑つた。ここ一ヶ月といつもの、もやもやした感情のまま過ぐしてきた彼らにとつて、いつもやつて笑いあえるのはとても幸せなことだつた。

「それでエミリア様？その髪は一体・・・？」

ああ、とエミリアが手を頭に伸ばした。

「私たちが死んだふりをしたのは知つてゐると思つたが、隣国は王に

対してそれを証明しなければなかつたの。もちろん無い遺体を渡すわけにもいかないから、代わりに私の髪を切つて王に送つたのよ」

エミリアは髪を切つたことで落ち込んでいる様子はなかつた。むしろさうぱりしていふようである。

しかし、レピオスはその言葉に疑問を持ち、首をかしげた。

「王はそれだけで納得しましたか？」

「髪だけで王が納得するだらうか。エミリアとルニアに接触しただけの自分すら疑い、城の地下牢に放り込んだのだ。その疑問はもつともだつた。それにヴェルチンが答える。

「いや、髪だけじゃない。俺は魔王を倒した時の使つていた剣を。ノーブル様は貴族の証である胸のバッヂを。全て俺たちが大切にしていたものだ。けして手放さないであらうといつな」

だからほら、とヴェルチンは腰に差している剣をレピオスに見せる。レピオスはあまり剣に詳しくはなかつたが、かつて見たヴェルチンの剣とは確かに違つていた。

「これもなかなかのものではあるんだが……。俺はあの剣を手放したくなかった。しかし剣を渡さないなら、鼻か耳か手か選べと言われてはさすがにな……」

まあ城でその剣が粗末に扱われることはないだらうから、そのうち取り返せるはずだと思つたらしい。ヴェルチンの言葉に半分納得したレピオスだつたがまだ若干疑問が残つているようだ。それに気付いたエミリアが補足する。

「あとは隣国の大臣が上手くやつてくれるといふ話だつたわ。あちらとしても時間は稼がないといけないから王に信じさせるためにいろいろ策を講じたはず。さらに言うなら、私たちが隣国に殺されたことは王としてもまだ伏せておきたい事実よ。後ろめたいことをしているという点で王は隣国より立場が弱い。あまり強く出ることもできないわ」

これはあくまで予想だが、隣国は替え玉すら用意したかもしけないとエミリアは考えていた。街攻めが終わつたばかりである。代用となる遺体は少なからずあつたはずだ。全身とは言わず、一部分だけでも・・・。そこまで考えてエミリアは思考を止める。これ以上考えてもどうしようもなかつた。

レピオスはとうあえず納得したようだ。そしてふと周りを見渡す。

「そういうえばルニア様はどうに? 一緒にではないのですか? ...まさか怪我を?」

孫同然に可愛がつっていたルニアの姿が見えず、もしやと不安になつたようだつた。しかし、その言葉に誰も反応しない。レピオスは順番に三人の顔を見まわしたが、三人ともがレピオスと目を会わせなかつた。

一方その頃、ルニアはヘレンに言われるまま国内へと潜伏し、多くの人物と会つていた。それぞれの場において、権力を持つ者たちである。内乱の準備は着々と進んでいたようだつた。

16話 回想 脱出

「それで何か御用ですか？ベトレイさん」

突然訪ねてきたベトレイを部屋の中に通し、椅子に向かい合つて座るとウェルは質問した。今の自分に特に用もなく訪ねてくる人がいるとは思えない。

「ええ。実はウェル様にお話したいことがあります。・・・これをお話するかどうか悩んだのですが、後で後悔しないよう申し上げないわけにはいかないと思いました」

その言葉にウェルが頷いたのを見て、ベトレイは話し出した。

「私は今ノーブル様の部下として、仕事の補佐をさせていただいています。それで私の仕事の一つにノーブル様の来客の管理をするというのがあるのですが・・・。

つい先日、ノーブル様に来客がありました。めったにないことですが、その方はノーブル様ご自身がお会いになると言われた方です。なので私はその方の詳しい素性を知らないまま予定の調整を行いました」

ウェルは相づちを打ちながら聞いていた。

「その方が来られると、私は席を外すようノーブル様に言われました。いつもならば護衛を兼ねて部屋に残ることになっているのですが、それも心配ないからとおっしゃられるのです。仕方なく私は部屋を出ました」

部屋を出たベトレイは、門番のよつと部屋のドアの前で待機していたといふ。

「素性の分からぬ相手です。ノーブル様に心配ないと言われても何があるか分かりません。私は部屋の中で何かあればすぐに飛びこめるよう待機しておりました。

そうして部屋の中に気を配りながらドアの前に立つていると、部屋の中からかすかに声が聞こえてきたのです」

小さく漏れてくれるだけなので話の全容は分からなかつたが、そこにときおりウヘルの名前が出ていたそうだ。

「最初はウェル様の褒美について話し合つてているのだと思いました。ノーブル様は常々ウェル様の事を心配しておられます。正直なところ、私の目から見てもウェル様の扱いはひどい。
ですからノーブル様は早くウェル様を家に帰すことができるよう尽力しているのだと思つていました」

しかし、その漏れ聞こえてくる話を聞いてみると、次第に様子が違つてきた。

「続けて、ノーブル様の声で“毒”といつ言葉や“刺客”といつ言葉が出てきたのです。私は耳を疑いました」

ですが確かに私にはそつ聞こえたのです、とベトレイは言つた。

「もちろんノーブル様がそのようなことをなさるとは思いません。ウェル様の話ではなく、単に別の話をしていたのだとも考えられます。ただ、今のウェル様の状況を踏まえると、どうしても私はそれが気になつてしましました。ですからこうやってウヘル様に知らせ

に来たのです

ただの気なし過ぎであれば良いのですが、と心配そうな顔をするベトレイだった。

ウヘルは少し悩んだ後、明るい表情を作つて答える。

「ノーブル様が私を殺そうとする」とはおそらくないと思っています。理由もありませんし、それに・・・の方とは何度もお会いしましたが、そのようなことをなさる方ではないと私は感じました。今あなたが言つたようにです」

その言葉にベトレイはウヘルの顔を見つめた。ウヘルは笑顔で見つめ返す。

「ベトレイさんもノーブル様がそのようなことをするとは思つていないです。それでもあなたはわざわざ気を付けるよう言いに来てくれた。そのお心遣いには感謝したいです。本当にありがとうございます」

ウヘルはそう言つと頭を下げた。ベトレイはウヘルに頭を下げられて驚いたのか、焦りながら頭を上げてくださいと手を振った。ウエルが頭を上げてまた笑うと、ベトレイも安心したのか笑い返した。

一応氣を付けていてくだること言つたところで、ベトレイの話は終わつたようだつた。

それではと椅子から立ち上がり、部屋を出て行こうとする。しかし、何か思い出したのか彼は途中で立ち止まり、ウヘルの方に振り返つた。

「ウヘル様。私はもう一つあなたに言つておかねばならないことが

ありました。これは自分の口ではつらかったいと思つていたことです

そう言つて一息つくとベトレイは大きく頭を下げる。

「魔王を倒していただいて本当にありがとうございました」

深々と頭を下げられて、ウェルは思わず立ち上がる。

「私が育った街は幾度となく魔王の軍勢に攻めたてられました。小さな街ではありましたが、そこの兵は優秀で何度も攻められても街を守りきつたのです。自分の父親も兵として働き、その命を落としてまで街を守りました。私はそんな父親に憧れて、自分も街のため、そして国のために働くつと思つたのです」

一度頭を上げたベトレイは、その時の思いを歯みしめるように言った。

「だから魔王は私の仇でもありました。ウェル様にはそれを代わって打ち果たしていただいたのです。感謝してもしつくせません」

また深く頭を下げる。少し、様子が変であつた。

ウェルはベトレイに近づき、頭を上げさせようとした。

「分かりました。分かりましたから頭を上げてください、ベトレイさん」

ウェルが困つている様子だつたからか、ベトレイは頭を上げる。その目は赤くなっていた。おそらくこの場でそのよつに言つつもりはなかつたのだろう。ふいに込み上ってきた感情に制御がついてい

ないようだつた。ウェルに感謝を伝えたところで、一気に溜まつていたものが噴出したのかもしれない。

頭を上げた後も彼はありがとうございます、ありがとうございます」と、すとウェルに言い続けた。ウェルはベトレイが落ち着くのを、その肩に手を添えながらじっと待っていた。

ベトレイが部屋から出て行つた後、ウェルはさつきの話のことを考えていた。

ノーブルが自分を殺そつとは考えられない。しかしその訪ねてきたという人物は気になる。いつたい誰なのだろう。パーティーの時のことといい、自分の知らないところで何か起こっている。自分の命を狙う者がいるとは思いたくもないが、気を付けるに越したことはないだろう。心配して気を付けるよう伝えに来てくれたベトレイの思いを無駄にしないよう、ウェルは心に決めていた。

そうして数日が過ぎた。

深夜のことである。自室にいたウェルは一人組の男に襲われた。ノックもなくドアが開き、抜き身の短剣を持った者たちが部屋に忍び込んできたのだ。

ウェルはベトレイの忠告をしつかり守つていた。忍び込んだ二人組はベットに寝ているはずのウェルに襲いかかる。しかし、ベットの上はもぬけの殻であった。ウェルは椅子に座つた状態で寝ていたのである。さらにいつ襲われてもいいように気を張り続け、常に剣を手放さずについた。もちろん一人が忍び込んできたことにも気が付い

ている。

ベットに誰もいないと気付いた一人組は周囲を見渡す。ウェルは椅子から立ち上ると彼らに声をかけた。

「誰に頼まれた?」

二人組は突然声をかけられたことに驚き、ウェルの方を見る。暗くて顔は分からぬがその体格から男であろうとウェルは思った。

襲撃が失敗したと気付き、片方がウェルに向かつて持つていた短剣を投げつけた。ウェルは難なくそれをかわす。しかしその隙に二人組は開いたままのドアから逃げ出していった。彼らにとつては正しい判断だった。

ウェルは逃げて行つた一人組を追わなかつた。襲撃が失敗したと見るやすぐに逃げ出したことから、彼らはおそらくこの手のことに慣れた者たちだらうと思ったからだ。彼らを捕まえたところでなかなか口を割らないだらうし、おそらく重要なことは何も知らされていないに違ひない。

しかし実際に刺客に襲われたことでウェルは考え方を改めなければならなかつた。

ノーブルへの信頼が揺らいだのは認めなければならない。そしてノーブルへの信頼が薄れたということは、この城の中に信頼できる人物がほとんどなくなつたのと同義だつた。

ウェルはすぐに城から出ることを決意した。もともと荷物は少ない。すぐに準備は整つた。

ただ、最後に自分の世話をしてくれていたメイドさんだけには挨拶していこうと思った。彼女と話している時だけは難しいことを考えなくても良かったのだ。そのお礼を言いたかった。しかし彼女はまだ寝ているだろう。どうするか悩んだウェルだったが、最後にはやはり挨拶していくことにした。

メイドさんは、ウェルの部屋の近くで寝泊まりしていた。その部屋の前まで来たウェルはドアをノックしようとして、その手を止める。こつそりと出て行かなければならないのだから音を立てるわけにはいかないだろう。

確認も取らず女性の部屋に入るというのは許されない気もしたが、事態は切羽詰まっていた。仕方ないとウェルはドアを静かに開けた。

「う言つては悪いかもしないがあまり女性らしくない、調度品の少ない部屋だった。性格が出ているのかもしない。しかし部屋をあまりじろじろ見るのも失礼だと思い、すぐにベットへと近づいていく。メイドさんはぐつすりと寝ていた。

その寝顔は可愛らしかった。一瞬起こすのがもつたいないとも思つたが、そんな状況でもない。肩を揺らして起こしにかかった。寝覚めは良い方のようだ。彼女はすっと目を開けると、ウェルの顔を見た。焦点が合わないのか何度も瞬きをする。そうしてはっきり人がそこにいるのを確認すると、彼女は口を大きく開けて叫ぼうとした。

ウェルは慌てて手を伸ばし、その口をふさいだ。首を振る。空いている方の手の人差し指を自分の口にあてた。

メイドさんの方でも田の前に立っているのがウェルだと分かったらしい。ウェルがうなずいて見せると彼女もうなずき返した。そつとウェルは抑えていた手を離す。

身体を起こしたメイドさんは、ウェルをほつきり確認すると慌てて言った。

「あ、あの、何か御用ですか？お茶ですか？」

混乱しているようだつた。当然だ。田が覚めたと思つたらすぐそこにウェルが立つっていたのだ。まずもつて意味が分からぬ。ふと彼女は下を向いて、自分の姿をみた。寝間着が乱れている。慌ててシーツを両手で掴むと胸のところまで持ち上げた。またウェルの顔を見る。その顔は赤かつた。恥ずかしがつてもいた。何か違うことを思いついたからだつた。

ウェルはこの時になつて後悔した。置き手紙で良かつた。しかし今となつてはどうしようもない。慌てて自分の来た理由を説明した。今からこの城を出していくこと、最後に感謝を伝えに来たことを。もちろん襲われたことは口にしない。無駄に心配をかけたくないかつた。

メイドさんはウェルの言葉を聞いて、残念そうな顔をした。ただウェルの決意が固いと分かると、今までありがとうございましたとウェルに最後の挨拶をした。

しかしウェルは城から出でていくことになつた。

1-6話 回想 脱出（後書き）

後半のようなのも必要かと思い書いてみました。慣れないので色々壊してたらすみません。

17話 内乱

助け出されてから数日後、メイドさんはなんとかベットで身体を起こせるまでに回復した。急きょ診察を行つたレピオスもこれならば安心だと太鼓判を押した。

もし彼女があのまま牢に閉じ込められていたら命の保証は出来なかつたかもしれない。助け出すことができたのは僥倖であった。

田を覚ましたメイドさんは自分が助かつたと分かると、一筋の涙を流した。彼女はまだ自分の身に起こつた幸運に実感がわいていないうだつた。ただその涙は牢の中で流したものとは違うとだけ、はつきりと分かっていた。

「助けていただいてありがとうございます」

メイドさんは見舞いに来てくれたヴォルチンとヒミリアに頭を下げ、そう言った。照れくさいのか、頬をかいだヴォルチンに代わり、ヒミリアは笑顔で返す。

「どういたしまして。あと、お礼を言つならレピオスさんにもね。近くに誰かいるつて言ってくれたからあなたを助け出すことができたんだから

もしレピオスが何も言わなかつたら、おそらく彼女には気付かなかつただろう。牢はそのほとんどが空いた状態だつた。レピオスのほかに誰かいるとは想像もしていなかつたのだ。

もともと地下牢は王に対する不敬や反逆をした者たちが入れられ

る場所として作られた。しかし時代の流れと共に、その役割は変わつていく。新たに建てられた収容所に彼らが収監されるようになつた後は、城に住む者たちが粗相をした際に懲罰として押し込まれる場となつたのである。

さらに今では、めつたにそういう意図で使われることもなくなつていた。だからこそ警備も甘く、ヴェルチンとエミリアの二人だけでレピオスを助け出すこともできたのだが。

「城に忍びこまなければいけないと最初聞いた時はどうなるかと思つたがな。でもまあもう一人助け出せたんだから悪くなかった」

ヴェルチンも笑いながら言つた。

レピオスが収容所ではなく、城の地下牢に入れられたのは理由があつた。彼の職業だ。ウエルの検死を頼まれた時のように、罪人の解剖などを頼まれることがあつた彼は収容所の人間と面識がある。

もし彼を普通の罪人のように収容所に入れた場合、大ごとにしたくない王にとつて面倒なことが起きると判断されたのだろう。だからこそ城の地下牢に放り込まれたのだが・・・逆に失敗だった。

「それで、あなたはどうしてあんなところに入れられていたの？」

エミリアはメイドさんが回復したら尋ねよつと思っていたことを口にする。そのエミリアの言葉に表情を暗いものに変えたメイドさんだつた。しかし覚悟を決めたようだ。

「私は・・・、聞いてはいけないと聞いてしまつたのだと思います」

メイドさんはもう言つて下を向いた。ヴェルチンとHIIコアさんは見合わせるとそのまま続きを促す。メイドさんは頷くと、少しずつ話しだした。

「あれは、皆さん方が使者として城から出られた後すぐのことでした。私がいつものように部屋を回って掃除をしていたら、その途中で、誰もいないはずの部屋から話し声が聞こえてくることに気付いたのです。そこで気にせずに通り過ぎればよかつたのですが、私はつい立ち止まってしまいました」

それはほんの小さな好奇心だった。もしかしたらあの夜のようなことが、と思つてしまつたのだった。

「私は部屋のドアに立つやうに耳を当てました。でも、そうして聞こえてきた話は私の想像とは全く違つていたのです。その方たちは、皆さんのことについて話していました」

中からは一人分の男の声が聞こえてきた。そのうち一人の声は聞き覚えのある声であった。

「“どうなるでしょう？”と、片方が言いました。“おそらく大丈夫だらう”ともう一人が答えます。“彼らがどちらを取るかといえば、名譽を取るに違ひない”と。始めは何の事を言つているか分からりませんでした」

しかし、少しずつ話を聞いていくうちに、ヴェルチンたちの話であることが分かつたといつ。

「私は話を聞いていくうちに怖くなつてしましました。だからでし

「う、掃除のために持っていた箒を手から離していたことに気付かなかつたのです」

それに気付いた時にはもう遅かつた。箒は大きな音を立てて床に落ちてしまつ。当然部屋の中にいた人物にも気付かれた。

「誰だ！」と大きな声がするとすぐにドアが開きました。私はどうすることもできませんでした。・・・そうして私は、あの地下牢に閉じ込められることになつたのです」

メイドさんの言葉に一人は考え込んだ。

彼女の言葉をそのまま受け止めると、王側は使者一行が裏切ることも予測していたことになる。そして自分たちがその命よりも名誉を取るだろうことも予想されていたのだ。思考が先回りされていたことに嫌な気分になる一人であった。

ただし唯一の誤算は、ルニアである。まさか彼女が隣国側に回るとは想像していなかつたらしい。そしてそのおかげで生き残つたとも言える彼らのことも。

「世の中思つよつて上手くいかないな」

ヴォルチンは色々な感情を込め、そうつぶやいた。
ヒリアは、疑問に思つたことを尋ねる。

「やつなると、あなたは中にいる人の顔を見たのよね。聞いたことのある声だと言つたけど、誰だったの？」

メイドさんは頷く。

「はい、一人は私の見たことのない方でしたが、もう一人は私が知っている方でした。その方はかつて私に、ウェル様のお世話するよう命じられた方です」

ヴェルチンの目が開かれた。

「確かに名前は・・・ベトレイ様だつたと」

予想外の名前にエミリアも驚く。

「それは間違いない？誰かと勘違いしてないかしら？」

「・・・いいえ。間違いありません。確かにあの方は、私に世話を命じる時ベトレイと名乗られました」

複雑になってきた話に一人は頭を悩ませながら考えた。ベトレイは確かにノーブルの部下だ。ウェルの世話をするメイドを手配したのが彼であってもおかしくはない。その点ではメイドさんの言葉は理解できる。

しかし、そのまま話を進めると、彼はヴェルチンたちが殺されるかもしれないのを知っていたということになるのだ。一方で、彼はレピオスを助ける時に手助けしてくれた人物でもあった。

頭がこんがらがるようだとヴェルチンは思った。おそらくメイドさんの言葉に嘘はないだろう。しかしそうなると、この状況で自分たちの味方をしてくれているベトレイは何を考えているのだろうか。その意図が読めず、ヴェルチンは頭を抱えた。

同様にしばらく考えていたエミリアだったが、一つ思いついたこ

とがあつた。

ヴェルチンの反応を見ようと、その考えを口に出そうとする。

「ねえ、ヴェルチン。もしかしたら……」

その時突然、三人のいる部屋のドアが開いた。駆け込むように部屋の中に入ってきたのはレピオスである。

「大変です！」

驚いた顔の三人に、彼は開口一番そう言つた。

「ルニア様が・・・ルニア様が・・・」

そう言つと彼は涙をこぼした。

ヴェルチンたちがメイドさんの見舞いに行く少し前のことである。ルニアは王都で一番大きな広場にいた。ルニアの目の前には演説台のようなものがある。そしてその向こうには多くの民衆が集まっていた。隣国が手を回して集めたのだった。

ルニアがその台の上に立ると、民衆から声が上がった。魔王を倒した勇者の仲間である。その人気はウェルには及ばないとはいへ、当然高いものであった。

民衆の声が鎮まるのを待つて、ルニアは話し始めた。

彼女は多くの人に聞こえるよう精一杯大きな声を出しているようだが、いかんせんそんな声は出し慣れていない。はつきり聞こ

えないその声に野次を飛ばす者もいた。

しかし、そのような者たちは周囲からの冷たい目に気付いたのか、それとも力ずくで黙らされたのか、次第にその数を減らしていく。最後には、その場に人がいるとは思えないほど静かになつた。改めてルニアは話し出す。

「お集まつて皆さん…どうか私の話を聞いてください…」

精一杯張つた声だつた。

「私はかつて勇者と共に戦い、皆さんを苦しめていた魔王を倒しました！」

それを聞いた民衆が声を上げる。収まるのを待ち、またルニアは話し始めた。

「ですが、勇者は魔王を倒した後、この王都から遠く離れた深い森でその短い命を終えました！皆さんはそれが、彼が魔王を倒した代償だと説明を受けているはずです！」

そこで一度視線を外し、ルニアは下を向いた。すぐに顔を上げる。

「しかし実際はそうではありません！勇者は…・・王の手によつて殺されたのです！」

ひと際大きなその声に、民衆はざわつく。

「私は勇者の死に疑問を持ち、その原因をずっと調べてきました！そうして今、確信を持ったからこそこうして皆さんに話しています！勇者は、いえウェルは、愚かしい王の身代わりとして殺されたの

です！」

そこから堰を切つたように、ルニアは王の企みを話し出した。その表情は必死だつた。民衆の反応次第でこれからのことが決まるのであるから当然のことだつた。

一連の発言に対し、民衆は様々な反応を示した。もちろん彼女に疑問を持つ者もいた。彼女の言葉以外に、客観的な証拠が示されていないからだつた。しかし、民衆の大多数はルニアの言葉をそのまま受け入れた。その心情を一言で表すならば“やっぱり”である。

これには、隣国がひそかに流していた噂が大きく影響していた。“ウエルの死には王が関わつてゐる”という至極簡単な、ある意味で邪推にも似た噂だつた。それ単体では突拍子もない、何の影響力もない噂だ。

しかし、そうであつたら面白いといふ集団心理も手伝つて、その噂は広範囲に広まつてゐた。それを受けたルニアの発言である。突如として目の前に提示された真相ではあつたが、受け止める土壤はできていたのだつた。民衆が飛びついたのも分からなくなかつた。

ルニアの演説が終わる頃には、民衆は王に対する怒りを堪え切れなくなつてゐた。彼女が話してゐる最中にも王を非難する声が何度も上がつた。またルニアは演説の途中から涙を流して訴えていたが、その姿も彼らの憤りをさらに強いものにしたようだつた。

すると民衆の一人がこゝ声を上げた。

“今から階で城に向かおう！王はその罪を贖うべきだ！”

隣国の息のかかった者であつた。彼は一人歩き出す。するとその言葉に同意する者たちが後ろを付いていった。次第にその数は増えて行く。そうして広場にいたほとんどの者たちが城へと歩き出したのだった。

ヘレンはその様子を見ると、伞から降りてきていたルニアへと話しかけた。

「お疲れさまでした。いい演説でしたわ」

興奮がまだ醒めきっていないルニアは何も答えなかつた。ヘレンは気にせず続ける。

「これで民衆はその数を増やしながら城へと向かい、王を出せと騒ぐでしよう。そしてそれを抑えるはずの兵は少ない。先日お会いしていただいた人たちがいいようにやつてくれるでしょうね」

これでこの国は混乱する。その隙を突いて私たちの国は領土を増やす。いえ、もしかしたらそれ以上のこともできるかも知れない。ヘレンは心の中だけで笑つた。

一方、ルニアは落ち着いてきた頭でこれから先のことを考えようとした。しかし、すぐに止めてしまつ。自分のしたことに後悔はないと、今度はそれだけを考えるようにした。思い込もうとしたのかもしれないがつた。

17話 内乱（後書き）

メイドさんに名前付けておけばよかつたなと。あと演説部分は後で少し修正するかもしません。

ウェルが墓参りから戻ってきた頃には、すでに日は落ちていた。家中に入つた彼は、ロウソクに火をつける。そうしてベットに横になると、今度はこれからのことを考え始めた。

当初の目的は達成できた。問題はルニアとの約束だ。今の状況からすると、家を訪ねて行くのはあちらに迷惑がかかるようにも思われる。おそらくルニアは大丈夫だろうが、しかしその家族に迷惑をかけることは憚られた。

まだ刺客を放つたのが誰なのかも分からないのだ。一度失敗したとはいっても襲ってくることもあるかもしれない。だとすれば、このまま家に滞在するのも危険だろう。自分の家の在り処くらいは掴んでいるはずだ。早足で家まで戻つてきたので、まだ時間があるだろうがそれもいつまでもつか分からなかつた。

自分はこれからどうしたらいいんだろう。そんなもやもやとした思考を巡らせていくうちに、いつの間にかウェルは眠つてしまつた。昼間の疲れが出たようだった。

日が覚めた時には、すでに日も高く上がつていた。

起き上がり、伸びをしたウェルはロウソクが燃え尽きているのを見て、吹き消して寝ればよかつたなと思つた。ベットから降りると身支度を整え、昨日の残りで作った食事を摂る。今度暖かいものを摂るのはまた先のことになりそつたので、彼はゆっくりと味わいながら食べた。

様々なことを考慮した結果、ウェルはすぐに家から出発することにした。まずはとにかく、長いこと待たせているルニアに会いに行かなくてはならない。彼女は今か今かと首を長くして待っているに違いないのだから。

自分が行く」とで起こりうる迷惑に関しては当然考えた。ただ、もしかしたら、自分が城から抜け出したことで、すでにルニアやその家族に迷惑がかかっているかもしれないとも思ったのだ。だからそれを確かめに行くのだと自分を納得させた。

ただし直接家に向かうのではなく、近くの街まで行き、あとは連絡してルニアに出てきてもらうこととした。待たせた上に出張させるというのは悪い気もしたが、それが一番問題の少ない方法だ。あとは誠心誠意謝ろうと思った。ウェルは遅い朝食を食べ終わると、すぐに家を出発した。

ルニアの住む街までは、普通に歩けば一週間で着く。しかしながら急いで、ウェルはやや速度を上げたまま歩き続けていた。すでに三田で道のりの半分を踏破している。この分だとあと一日ほどで到着できそうだった。

そうして、四田町の朝のことだった。ウェルはどういう顔をしてルニアに会えればいいのか考えながら歩いていた。待たせたことに彼女は怒っているだろうか。だったら何か手土産を買っていった方がいいか。そうやって悩みながら歩いていたからだろう、一人の男が自分に近付いてきていることにウェルは気付かなかつた。

「すいません、～～の街に行くにはこの道を真っすぐで合つてます

か?」

その言葉で意識が田の前に戻る。自分を呼びとめたのは少し太つた中年の男だった。

「あのー・・・

反応がないのは聞き取れなかつたからだと思つたのか、その男はさつきの質問をもう一度繰り返した。ウェルは頭を切り替える。

「あ、すいません。今ちょっと考え方をしていて。えーと、～～の街ですか?」

自分の知つてゐる街であった。そして途中まではウェルの通り道でもある。

「ここの道を真つすぐで合つてますよ。でもここから少し進むとこくつか分かれ道があつて・・・ちょっと複雑かもしれませんね」

ウェルの言葉に不安そつた顔をした男であった。

「そうですか・・・。実は初めて通る道なのでびっくりも困つてしまつて・・・」

男は額の汗を手でぬぐい、下を向く。なんとも困つた様子であった。

「・・・それなら、もし良ければ途中まで自分と一緒に来ませんか?ちょうど自分も同じ方向に向かいますし、話し相手も欲しかつたですから」

思いもよらない提案をされた男は顔を上げ、いいんですかとウェルの顔を見る。ウェルが頷くと、男は助かつたとばかりに表情を崩した。

その男は嫁いだ娘とその孫に会いに行く途中だった。

「いや本当はうちのも一緒に来るはずだつたんだよ。でも出がけに足を挫いてしまってね。一応大事をとつて家に残してきたんだが、まあ残念がつて、残念がつて」

始めは丁寧な言葉遣いだつた男も次第に慣れたのか、口調が崩れてきていた。まるで知り合いの息子に話しかけるような話し方だ。しかしウェルにはそれが心地よいものに感じられた。敬語ばかりでは息が詰まるところ最近知つたからだつた。男の話に相づちを打ちながら、ウェルは道を歩き続けた。

「そういえば何をしにその街へ？」

自分ばかりしゃべっているのが悪いと思ったのか、男はウェルに尋ねた。

「約束していた人に会いに行くんです。だいぶ待たせてしまつて」

ウェルがそう答えると、男はああと納得したように頷き、ウェルの方を見てにやついた。

「彼女かい？」

ウヘルが慌てたように首を横に振ると、男はいいんだけどウヘルの肩をばんばん叩いた。

「やうかあ、大事な人に会いに行くのか。羨ましいな。俺にもそういう時代はあつたはずなんだが、もつその時の感情は思いだせないしなあ」

どうやらもう修正は効きやうになかったので、ウヘルはただ笑っていた。

「いいなあ若いってのは」

やう言つて男は上を向いた。そして久しぶりに自分の過去を思い出してこるらしかった。

「その人とはしばらく会つてないのかい？」

「ええ、数ヶ月くらい」

そうかと頷いた男は、何か思いついたような顔をした。

「それじゃあ、久しぶりに会つ彼女にこれを渡すといい。道を教えてもらつたお礼だ」

男が渡してきたのは、細い鎖で出来たブレスレットだつた。旅の途中で買つたものだといつ。

「娘にやううと思つていたんだが、気が変わつた。まあ、また娘には違うものを買えばいいから」

やうやうとウヘルは遠慮しようとした。しかし、男はウヘルの手に

無理やりブレスレットを握りせる。

「いいんだ。何かお礼をしたいと思つていたし、それに待たせた女の怖さは君よりも知つてゐるつもりだから」

男はそう言つてウェルに笑いかけた。結局、ウェルはお礼を言ってブレスレットを受け取った。

男とは半日ほど歩いたところで別れた。できる限り細かく道筋を教えてから別れたので、恐らく無事に到着するだらうとは思つ。

なんとなく、ウェルは先ほどもらつたブレスレットをポケットから取り出して眺めた。装飾品のことはあまり詳しくないが、手に持つた感じからするとあまり安くはないだらう。

道案内をしたぐらじでこのよつなものをもらつていいんだらうか、と申し訳ない気もした。しかし、厚意だからと言われては断ることも難しい。まあ手土産を買って行こうかとも考えていたのぢょうど良かつたかもしねない。

ウェルはまたポケットにブレスレットを仕舞つた。あともう少しで目的地の一つ手前の街に着きそうだった。

城に待機していた兵士たちが、押し掛けてきた民衆をバッタにか門の前で抑えていた。

民衆は口々に王を出せと騒いでいる。時間がたつごとにその数は増えていくように感じられた。兵士たちは身の危険を感じながらも、律儀に与えられた職務を守っていた。

しかしそのままいけば、早晚抑えきれなくなることはやっこりする誰の目にも明らかであった。

「外はバッタなつていいる」

王は落ち着き払つた声で、ベトレイに尋ねた。

「着実に悪くなっています。民衆はその数をどんどんと増やしており、このまま事態が進めば抑えきれなくなるかと」

やうが、と一言つぶやいた王は座っていた椅子から立ち上がり、部屋の窓のそばまで歩いていく。ベトレイはひざを着いた姿勢を崩れず、下を向いたまま控えていた。

「この状況で取り乱さずに振舞えるのはさすがに王だなどベトレイは思った。そう思えるほど状況はよくない。何の前触れもなく城の前に民衆が現れ、王を出せと口々に騒いでいるのだ。もちろん城には兵士が常駐しており、すぐに城に民衆がなだれ込むという事態にはならなかつたが、何事も限界がある。さらに確認したところ、今 日に限つてその兵士の数も少ないのであつた。

その理由の多くはもちろん隣国の中の手によるものだが、それを知る者は少ない。

具体的に例を上げれば、登城してくるはずの貴族のうち、半数が今日に限つて来ていないのだった。当然、その警護の者たちも城にいない。貴族は一人につき、十数名の警護を普段は連れて来ていたのだから、その半数が来ていないのではだいぶ戦力が落ちる。

一人につき、十数名の警護というのは少し過剰にも思えるが、ある意味で警護の数はその貴族のステータスを表していた。また連れてきた人員の半分以上は城に来ると城周辺の警備に回される。王にとっては余分な人員を配備しなくても良いので得であつた。

しかし今回はそれが裏目に出ている。最低限の数しか置いていい城の兵士だけでは民を抑えるのに手が足りないのだ。

さらに予想外だったのは、兵士の質であった。仕事に慣れているはずの熟練の兵士のうち、少なくない数がここ数週間で城を去つてしまっていた。まるで引き抜きを受けたかのようであつた。彼らが抜けた負担はもちろん残された者たちにかかる。突然増える勤務時間に残された兵士たちの士気はしばらく前から下がっていた。

「申し上げにくいことですが、城を捨てる考えてはいかがですか」

ベトレイは下げていた顔を上げ、王に提案した。

「・・・それはできん」

王は少し考えた後、そう答えた。

「多くのものを犠牲にして私はいまここにいるのだ。私がここを動くわけにはいかない」

ベトレイは窓から外を眺めている王の横顔をつかがつた。その意思は固じように思われる。

「彼らの田の前に弓を出されれば、『自身がどう扱われるか分かつておられますか』

その言葉を聞くと王は窓から視線を外し、ベトレイの方に向き直った。ベトレイの物言いは平時なら不敬と謗られるようなものであったが、王は何も言わなかつた。

「もちろん分かつてゐる。たとえ個々がどれほど素晴らしい人物であつても、集まれば人は途端に愚かになる」

「・・・お分かりになつた上で、ですね」

ベトレイは諦めたように顔を横に振ると、立ち上がつた。

「状況に変わりがないかどうか、確認してまつります」

王が軽くうなずいたのを見て、ベトレイは王の部屋から出て行つた。一人部屋に残された王は向き直り、再び窓から外を眺めた。王の部屋の窓からは城の正門を眺めることはできない。窓の向こうにはいつもと変わらない景色が広がつていた。

王にとつて、全ての始まりはやはり勇者の存在であった。王は確かに勇者を利用しようとした。不満を持った民衆の田を逸らしせる、悪く言えば、王にとつての盾であった。だからこそ彼を無理にでも城にとどめようとした。自らの評価を下げても国を維持するためにはすべきことだと思った。

勇者が城から抜け出したと聞いた時は思わず怒りがわき上がった。勇者に対する怒りではない。そこまで追い込んだ自分の振る舞いに對しての怒りであった。すぐに使者を勇者の自宅に送った。なんとか城に戻つてもらえるよう強く願つた。しかし戻ってきた報告は全くの予想外のものであった。

その報告を聞いた時はなによりもまず、これからどうするべきなのかと頭を抱えた。窮余の策としてその死が広まらないように抑えたが、それがただの時間稼ぎであることは十分に分かつていた。

問題を解決してくれたのは、ひそかに接触してきたベトレイの一言であった。彼はこう言った。“勇者を死せる英雄にしてしまえばいいのです”と。それはまさに発想の転換であった。その一言で王はベトレイを信頼するようになつた。

民衆に城に詰めかけているこの状況においても、さきほどのベトレイは落ち着いていた。このまま信頼しておいても間違いはないだろ。だからといってこの状況をひっくり返すことを期待しているわけでもないが。

自分の身に関する話はもう諦めておくべきだろう。ただ隣国との兼ね合いを含め、この国の行く先だけが心配であった。

一方、ベトレイは王の部屋から出るとすぐ兵の指揮所へと向かつた。

「状況に変わったことはあったか?」

詰めていた兵士が首を振る。少なくとも悪くなつてはいなさそうだった。うなずき、このまま頼むと言くと、ベトレイはすぐこまた指揮所から離れよつとした。それを兵の一人が呼び止める。

「ベトレイ様、王にいらっしゃりに来ていただくことはできないでしょうか」

確かに本来であれば、王はこの指揮所に詰めていなければいけないはずだった。もちろん指揮を執ることを求められているのではない。それは慣れた者が代行する。問題は王の判断が必要になる場合であった。すなわち最悪の場合である。

また同時に、兵の士気を下げないためにもその存在は必要であった。誰もここに隠れている王のために働く気にはなれないからだつた。

兵の言葉にベトレイは一瞬考えて、言った。

「王は君たちを信頼してこの場を任せている。どうかその期待に応えてほしい」

兵はおもわず苦笑いを浮かべた。このような状況での遠まわしな表現が面白いらしかった。ベトレイも少し表情を崩すとその兵の肩を軽く叩き、そのまま指揮所を出て行った。

ベトレイが去った後、しばらくして指揮所から出る者がいた。彼は人気のない方に向かって歩いていった。そうしてある部屋の前まで来ると、周囲をつかがつてから静かに部屋の中へと入った。

部屋はカーテンが閉め切られており、ロウソクが灯されているものの薄暗いままであった。部屋の中に進むと一人男がいた。椅子に座り、腕を組んでいる彼に声をかける。

「王はどのよろんな様子ですか、ベトレイ様」

声をかけられたベトレイは顔を上げ、男の顔を見た。

「おそらくだが逃げ出す気はないようだ。さすがに王の座にいる者だな」

ベトレイの話しぶりは先ほど兵と話した時とは大きく違つていた。誰がどう聞いても冷たさしか感じられない口ぶりであった。

「それではどうあるおつもりですか。予定では逃げ出したところを、でしたが」

「いや、ここのままでいいだらけ。多少の違いはあるが結果はそれほど変わらない。・・・王はこゝまでだ」

ベトレイは一度男から視線を外した。

「やの間、ここのままでいいでほえてくれ

「わかりました。・・・それでは

時間にして、一分にも満たない会話だつた。男はあつさりと部屋から出て行つた。ベトレイはそれを見送ると視線を正面に戻し、おもむろに手をつぶる。強く腕を組み直した。

いまの言葉の通り、王はもうどうすることもできない。もはや誰も助けられない。あと一步であつた。あとほんの少し時間がたてば全てが終わる。この複雑な状況も、複雑な自分の立場も、何もかも。同じ運命になる可能性もある。

それはそれで良い気もした。考えてみれば、あの勇者を裏切った瞬間に自分の行く先などどうでもよくなつたのかもしなかつた。

勇者のことを考えていると、ふいに自分の故郷のことが思い出された。しばらく思いだすこととなかつたのだが。未だに自分は仮定の話から抜け出せていないらしかつた。

それはもはや考へても仕方のないことだつた。ベトレイは、はつきり分かっていた。だからこそベトレイは、それを振り切るかのように勢いよく椅子から立ち上がり、そのまま部屋から出て行つた。

彼が勢いよく閉めたドアの風に煽られ、部屋のロウソクの灯りはゆらゆらと揺れていた。

19話 城内（後書き）

だいぶ空いてしまいましたが、続きです。頑張って終わらせようつと
思います。

ヴェルチンとミリアの二人は屋敷を出てすぐにルニアがいたという広場に向かつたが、すでにルニアは去った後であった。それならと今度は民衆が集まっているという正門の近くまで来たが、そこにもルニアの姿は見えなかつた。

「すごい数の人人がいるわね・・・」

ミリアの言葉にヴェルチンはうなずいた。おそらく隣国が手を回しているだらうとは思ったが、まさかこれほどまでの人数を集めるとは思わなかつた。もしかしたら全く違うところで、王への不満は燻つたままだつたのかもしない。いまはまだ均衡が保たれているが、いつそれが崩れるともわからなかつた。

王はどうするつもりだらう。ヴェルチンはまずそれを考えた。民衆を説得し、解散させることはおそらく無理である。いまやその集団は暴徒に近い性質だ。言葉で彼らを鎮めるのは諦めた方が良さそうだった。

しかし、だからといって力で抑えることも難しい。兵が武器をかざしてみせたところで勢いのついた民衆は動かないだらう。もちろん装備やその質といった点から言えば、城に控えている兵士たちの方がしつかりしている。数が少ないとはい、本気でや攻撃すれば民衆を散らすことはできるかもしない。

ただし、その場合は大きな犠牲をともなう。鎮圧というより虐殺に近くなるのだ。その後を考えると、あいそれと選べる手段ではなかつた。

現実には城の戦力が足らないために民衆を力で潰すといふことは出来なかつたが、この時点でヴェルチンは城の兵の数が少ないことを知らなかつた。

ただ、兵の数が揃つていたとしても、やはり難しいことに変わりはなかつただろう。守らねばならない民衆を攻撃するなど、兵士たちは納得しない。この時代、一般の兵士と民衆の意識に大きな隔たりはないからだつた。

そこまで考えて、ヴェルチンは一つの答えを出した。

王が逃げればいいのだ。民衆が落ち着くまで身を隠すことで解決を図る。怒りはいつまでも持続するわけではないから、時間がたてば民衆も散つていくはずだつた。少なくとも最悪の結果は避けられる。

「王は身を隠すと悪い」

ヴェルチンは考えたことをミリアに話すとした。

「やうね。おそれべやつ時間を置かないと城から出るまずよ」

ミリアも同じようなことを考えていたらしかつた。話が早い。

「それでだ。俺たちはどうする

今度の問い合わせ、ミリアは無言だつた。何かを考えているようだ。

「俺たちの目的はウェルが死んだ理由を調べることだつた。そうして王がその原因だと分かつた。・・・俺たちは王にその償いをしてもらおうと思つた」

その言葉にエミリアはヴェルチンの顔を見る。

「ただ、じついう形で王が失脚していくのは少し違つとも思つ。それにまだ分かっていないこともあるんだ。このまま何もかも終わつてしまえば、俺たちははずつともやもやしたまま生きることになる。だから」

そこまで言つたところでヴェルチンは口を閉じた。エミリアが右手を田の前に出して制止したからだつた。

「城に入りましょ。王が身を隠してしまえば私たちがそれを探す手段はない。いましかないわ」

エミリアの言葉につなづくと、その準備のためにレピオス達がいる屋敷に急いで戻ることにした。

一方その頃、ルニアは焦つていた。

ヘレンの作戦通り民衆を扇動して城に向かわせたものの、やはり集団を思い通りに動かすことは難しかつたのである。予定ではすぐ民衆が城の中へとなだれ込み、そのまま王を引きずり出すはずであつた。しかし現実として、未だに民衆は門の前で待機している。

集団に入り込んでいる者たちが煽つてゐるはすだが、じばらくなだれ込む氣配はなかつた。

「どうなつてこゐの?」

正門近くの民家の中にいたルニアは、近くに座つてゐるヘレンに尋ねた。問ひ詰めるような口調である。

「どうなつてゐるも何も、順調に進んでゐるぢやありませんか。門の前にいる数はいまも増えているでしよう? もう少し時間がたてば全て上手くいきますわ」

確かにヘレンの言つ通りであった。ルニアはその言葉に何か反論しようと口を動かすが、何も思いつかなかつたのかそのまま横を向いた。そんなルニアの姿を見てヘレンは苦笑する。

「焦つても仕方ありませんわね。私たちは待つてゐることしかできないのですから」

傍から見ている限り、すべてが順調に行つてゐるよつて思われる一連の出来事は、違うところから見ると意外に綱渡りの部分が大きかつた。

例えば、今回の大きな役割を占める民衆について。個々の意識が薄れる集団においては、いつ何時予想外のことが起きるか分からぬ。そのため、建てられる予測は幅を持たせたものになつてしまつのだ。

ルニアの言つことはあくまで最も幸運に恵まれた場合のことである。そななる可能性は低いわけではなかつたが、そなならぬ可能

性ももちろんあつた。そつならなかつた時のためにヘレンは様々な準備をしていったのだが、それだつて全てが効果を發揮するわけではない。

いまのところ、最大の誤算は自分の軍隊が使えなくなつたことだつた。民衆の蜂起に合わせ、ヘレンは救援といつ名目で軍隊を動かすつもりであつたが、本国からそれを控えるよう連絡が来たのだ。これをヘレンは、対立する一派の工作だと思っていた。この件で一層強い権力をを持つであろうといつ自分が奉制だと考えたのだ。

実際この時隣国内では、長年の悲願であつた土地を取り戻したことで、すでに満足だという空氣があつた。そのため、この動乱に関しては積極的に関わらないという暗黙の了解があつたのだが、国にしばらく帰つていないヘレンはその空気に気付いていなかつた。ヘレンは周囲からずれはじめていたのだった。

とはいへ、いま現在状況はヘレンたちに有利である。このまま王を捕えてしまえばなんとか格好は付けられた。

しばらくしてのことである。窓から正門の方を眺めていたルニアが突然部屋から出て行こうとした。

「どうした？」

ヘレンがルニアに声をかけた。

「・・・外の空気を吸つてくる。ここだと息がつまりそつだから」

そうですか、とヘレンは視線を戻した。ルニアの言葉の硬さには

全く触れなかつた。ルニアはそのまま部屋から出でていつた。

正直に言えれば、あの演説が終わつた時点でルニアの大きな役割は終わつていた。王が捕まつたら話をさせろといつるルニアの願いで、ヘレンはまだ彼女と一緒に行動していたが、たとえこのままいなくなつたとしてもそれほど不都合はなかつた。

「さて、どうなるかしら」

ヘレンは一言もうつぶやくと、両手を組んだ。そして眼をつぶる。そうすることであえ間なく聞こえてくる喧騒がふいに聞こえなくなつた気がした。

21話 理由

屋敷に戻ったヴェルチンたちは、城を仕事場にしていたノーブルになんとか城に入る方法はないかと尋ねていた。

「今の状況ではベトレイと連絡を取ることもできません。レピオス殿を助ける時に通った城の裏門は、城内と連絡がつかないと使いないでしょ?」

ノーブルが言うには、城への正規の入り口は正門と小さな裏門が二つしかないらしい。正門はさきほど一人が見たままの状況であるし、裏門は使えない。

「ほかに城に入る方法はないの?」

そう尋ねたのはエミリアだ。

「ええ、あとは縄を使って城壁を無理やり乗り越えるという方法が考えられますが・・・。真昼間にそんなことをしては目立ち過ぎます。城の中を巡回している兵にすぐに見つかってしまうでしょう。それこそ真夜中でもない限り難しいと思います」

そう言つてノーブルはため息をついた。

「巡回している兵も今は正門に集まっているだろ?。なら場所を選べば気付かれないんじゃないかな?」

ヴェルチンは思いついたことを口にする。

「それは確かに考えられます。しかし、場所を選ぶと言つても縄で乗り越えられるほど低い城壁の場所は限られていますし、もちろん城の兵もそれは承知しています。おそらくどこも最低限の見張りはいますから、見逃してくれる可能性は少ないかと」

「どうか」と考へ込むようにヴェルチンは下を向いた。どうやら予想以上に城に潜入するのは難しいようだ。

話をことさら難しくしているのは、一人が兵に見つかってはならないということだった。例えば先ほど否定された城壁をよじ登るという案は、見つかってさえ良ければ何も問題がなかつた。彼らであれば兵に止められたとしても力ずくで押し通すことができただろう。ただそうすることをヴェルチンもエミリアも望まなかつた。少しでも犠牲を減らそうとして動いていのに自分たちが人を傷つけては意味がないからだつた。

「本当に城への入り方はそれしかないの？」

エミリアはしつこく確認するように再度ノーブルに尋ねた。その言葉にノーブルは力なくうなづく。それでもなんとかできないかと、彼も必死に方法を考えているらしかつた。

ちょうどその時のことである。三人のいる部屋のドアがノックされた。こんな時に誰だと思いながらもノーブルはどうぞと声をかける。すると静かにドアが開いた。そして部屋に入ってきたのは、隣の部屋で安静にしているはずのメイドさんとそれに付き添つていたレピオスだつた。

部屋に入ってきたメイドさんは開口一番こう言つた。

「あの、私、陛下のお役にたてるかもしさせん」

少しだけではあったが、城内は混乱し始めていたようだ。といつのも城の警備をしている兵の士気が日に見えて下がってきたのだ。もとより士気が高いわけではなかったが、ここまできると血壊の兆しすら感じられるようだった。

「ですから王、もう一度考え方直していただけないでしょうか」

ベトレイは再び王の部屋を訪れ、王に逃げ出すことを再度提案していた。

「いや、ベトレイよ。それはできない」

それでも王は意思を曲げなかつた。しかし一方で、ベトレイがこれまで繰り返し提案していくその意味に気が付いてもいた。

ベトレイの発言は、その裏を返せば、逃げないのならばやく行動を起こせということだった。端的に言つなら、被虐が大きくなる前に自分から民衆の前に出るということである。

「のまま無為に時間を過ぐせば民衆を抑えきれなくなることは分かりきつていたし、そうなつてしまえば兵は自らの身を守るために民衆に刃を向けなければならなくなる。その点、王自ら民衆の前に出てしまえば、結果がどうあれ最終的に流れれる血の量は少なくなるはずだった。」

当然ベトレイは直接的にそんなことを言つわけにはいかない。だ

からこそ言外に意味を込めた上で、繰り返し逃げるよつと説得しているのだ。

王はそれに気付いていながら、それでも行動を起こさなかつた。彼の立場がそうさせるのか、もしくは単なる意氣地のなさからきているのか。ベトレイには判断がつかなかつた。

結局王はベトレイを部屋から下がらせた。時間が欲しいとのことだつた。王を説得しようとしたしばらく粘ついていたベトレイだつたが、最後には諦めた。自分の望む工程と違うとはいへ、最後の結末は同じであるからだつた。

王の部屋を出たベトレイはそのまま指揮所に向かわなければならぬのだが、彼はとてもそんな気分にならなかつた。指揮所に着いてしまえば、また兵士からの突き上げをくらうことになる。自ら望んだことながら、いまや王との連絡係になつてている自分の立場を少しばかり面倒だと思つていた。

しかしこの立場のおかげで、自分の目的を遂げることができるのだから不満を言つても仕方がない。ベトレイは心の中で一つため息をつくと、指揮所へと歩き出した。

ベトレイはとある小さな街で生まれた。

その街は、よく魔物の被害を受けていることで有名だつた。どうやら周囲の土地の豊かさを知つた魔物が田を付けていたらしい。しかし、小さい割にこの街の自警団は強力で、魔物の集団に攻め込まれてもいつもそれを跳ね返していた。

この自警団の長、その息子がベトレイであった。街を守るために魔物と戦う父の、その大きな背中を見て育つた彼は、自分も父と同じ道を進みたいと思っていた。そしてそんな彼を父も好ましく思っていた。

だが彼が成長していくにつれて分かったことがあった。残念なことにベトレイには戦闘の才能がないのだった。もちろん彼はできる限りの努力をしたがその体つきは細く、魔物と戦うにはどうにも体力が足りなかつたし、技術も伸びなかつた。

一方で勉学の方は、他に追随を許さないほど能力が高かつた。ただ、そのことにベトレイはあまり納得できていなかつた。どうして思うようにいかないのだろうと悩んだこともある。

それでもその頭の良さを生かし、役人になつたことを父は喜んでもくれた。ベトレイが考えを改めたのは、自分よりも多くの人を守れるぞと父が言ったからだつた。

故郷を離れ、王都で暮らし始めてからしばらく経つた頃、魔王が活発に行動し始めたという知らせが届いた。すぐさま王は勇者たちを呼び出し、魔王を討伐してくるよう彼らに命じた。その時ベトレイは初めて勇者一行の姿を見た。自分が持たないものを持っている彼らを見て、少し暗い感情を抱いた彼だつた。

それから半年が経つた頃、自分の住む故郷が魔物に攻め込まれたことを聞いた。今までと違い、攻め込んできたのは組織だった魔物の集団だという。魔王の影響であつた。どうやら父も怪我をしたらしい。いつたんは追い返したらしいが、再び攻めてくる事を考え、王都に救援を求めていた。

もちろん王は救援を出すだろうと、ベトレイは思っていた。道理であるからだつた。しかしその予想は裏切られる。王は余裕がないと救援を済つたのだった。

役人として、王よりも正しく現状を把握していたベトレイは王の判断に開いた口がふさがらなかつた。どうにかやりくりすれば救援の軍は出せたはずなのである。統制に多少の混乱は生じたかもしれないが、やつてできないわけではなかつた。

王は軍を送るよりも、住民にその街を放棄させた方が最終的には利があると判断したらしい。それも間違いではなかつた。ただ、そうとしても個人が持ち出せる物など限られている。街を捨てるとはすなわち個人の財産を捨てるのことと同義であつた。保障さえあれば悪くないかもしれないが、魔王の出現で支出の増えた財政ではそれもひどく難しいことであつた。

そして最悪の結末を迎えることになつた。財産を捨て切れない住民が多く街に残つたために、自警団も街を離れるわけにはいかなくなつたのだ。そうして再び魔王の軍勢に攻められ、残つた住民は全滅した。その中にはベトレイの家族も含まれていた。

瞬く間に家族を失つた彼は、しばらく茫然自失の状態だつた。まるで体の一部が無くなつてしまつたかのようであつた。少し時間が経つと、彼の心の大部分を占めるようになつた感情があつた。王に対する怒りだつた。

そしてこの怒りこそが、これから先起じること全ての元凶とも言えるのである。

21話 理由（後書き）

次回作の導入部分（仮）を書いてみたので、よろしければそちらも見ていただけだと嬉しいです。 <http://ncode.syosetu.com/n2488u/>

怒りは收まるわけもなく、ベトレイは王への復讐を考えるよつになつた。

しかし、一介の役人でしかない彼にとって、國の長たる王をどうにかするなど到底不可能なことである。例えは隙を付いて寝ている王の部屋に忍び込み、直接手を下すということも考えた。だが、いかんせん暴力の才能は彼にはなかつたし、またそれほど簡単に事が進むとも思えなかつた。

いちかばちかではなく、確實に王を誅することができる方法、それが可能なら王ができる限り苦しむ方法はないかと、彼は頭を巡らせていた。

彼に一通の手紙が届いたのはそんな時のことである。その手紙に差出人の名前はなかつた。心当たりもないベトレイは誰がこんな手紙を書いたのだろうと少し怪しく思つたが、とりあえず封を開けて読んでみた。その内容は彼をとても驚かせるものだつた。

この手紙を書い人物は、ベトレイの王に対する恨みを全て知つてゐるようであつた。そしてその上で、あなたのお手伝いがしたいと書いてあるのだ。またもしあ手伝いさせていただけるならば、この場所にこの日この時間に来て欲しいと、日時と場所の指定までされていた。

書式や文字の雰囲気からなんとなくではあるが、この手紙は女性が書いたものだと思われた。それもある程度地位のある人物だらう。それを踏まえてもやはりこのようなことをする人物は思いつかなか

つた。

ベトレイは少し冷静になれるよう手をつぶつた。

まずなぜこの手紙の主は自分の持つ恨みを知ることができたのか。ベトレイは誰にも王への恨みなど話したことはない。その素振りも人前では出していないはずだ。唯一ありえるとしたら、自分の出自を調べれば王への恨みを持つているかもしれないと類推はできる。しかし、あくまでそれは想像に過ぎず、この手紙の内容ほどに確信を持てるだろうかと疑問が残る。

またなぜ自分を手伝おうとするのか。単純に考えれば、この人物も王にいなくなつてほしいのだろう。ある程度高い地位にいると考えると、王と対立する貴族の誰かだろうか。

一方で、それらとは何も関係のないものとも考えられる。反乱分子の炎り出しの可能性だってあるのだ。考えられることが多過ぎる。

しばらくベトレイは頭を働かせていたが、結局彼はそれを止めた。結果として相手に王への恨みを知られてしまつてはいる以上、それを公にされないようにベトレイはその人物と接触しなければならない。そういう意味ではあの手紙には脅しの意味も含まれていた。

それにベトレイ一人では復讐など到底不可能なことだ。協力して事にあたれるならそれに越したことはない。お互いをただ利用するだけの関係でいいのだ。事が終われば自分の身すら危うくなるかもしれないが、それならベトレイは覚悟した。

田を開けた彼は、指定の場所に向かつことを決めたのだった。

ヴェルチンたちはすでに城に潜入していた。もちろんだれにも見つかっていない。急ではあつたが、ノーブルがどうにか用意した兵士の鎧を着て、二人は城内を歩いていた。

「おや、王は指揮所にいると思つわ。まずはそこに向かいましょう」

エミリアはヴェルチンに小さな声で話しかける。エミリアも兵士の格好をしているが、さすがにそれだけでは女だとばれてしまうので田深にヘルメットをかぶり、顔と髪を隠していた。

「ああ。しかしあ前、動く度にヘルメットが揺れてるぞ。歩き方もぎこちないし。やっぱり使用人の格好をした方がよかつたんじゃ……」

エミリアにぴったりと合った鎧がなかったので、次善の策として使用人の服も用意されたのだが彼女は頑なにそれを拒否した。動きにくくなるとの一点張りで押し通していくが、その時の顔からすると明らかに違う理由がありそうだった。

「嫌よ」

やはり一言で撥ねつけられ、ヴェルチンは肩をすくめた。彼の方はさながらベテランの兵士の様相であった。

メイドさんに教えられたのは、城に通じるもう一つの入り口であった。いや、正しくは出口と言つた方がいいのかもしない。とい

うのも、そこは使用人たちが逃げるためのものだつたのだ。

城に勤める使用人は、用事が無い限り基本的に城から出られない。それは城の中のことをむやみやたらに喧伝されないよう」という理由があつてのことだが、当人たちにとつてはある意味囚人のような扱いであつた。特に若くして城に入つた使用人の中には、そのような管理を受けることに不満を持つ者もいた。

そのうちの一人が腹に据え兼ねて、この出口を作つたのである。彼は城の内外で人目につかない場所を探し出し、少なくない時間をかけて城壁にやつと一人が通れるほどの穴を開けた。そして少し見ただけでは分からぬように見ためだけを補修したのである。つまり、一度だけ使える出口を作つたのだ。

見つかつた場合極刑すら受けかねない行動を、若さからくる無謀さで彼はやり遂げた。さらにその勢いのまま、そのことを信頼できる人物に話したのである。どこまでも無謀すぎる振る舞いだったが、奇跡的に今日までそれが公になつたことはなかつた。メイドさんはこの時にその場所のことを知つた。

公にならなかつた理由の大部分は、厄介事に関わりたくないという使用者たちが多かつたからだが、一方で、その気になればいつでも逃げられると知つているのが彼らの精神安定に役立つていたということも挙げられる。それもあつて、まだその出口は使われたことはなかつた。

ヴェルチンたちは逆にそこを入り口として使つたのである。メイドさんに教えられた通りの場所で壁を調べると、確かに一か所だけ妙な部分があつた。力を入れて剣首で叩くとすぐに崩れる。うなづきあつた二人はそこから城に潜入したのだった。

「思ったよりも兵士の数が少ないな。それに士気も低い。これは門が開いてしまつたらどうしようもなくなるんじゃないか」

他人事のように、ヴェルチンはつぶやいた。むしろよくこんな状態で城が持っているものだと感心したようである。指揮している者がよほど優秀であるに違いない。

「……この状況だとやっぱり王は逃げるしかないわね。守る兵がこれだと途中で捕まっちゃいそうだけど」

「だからそれより先に俺たちが会わないとな」

Hミリアの言葉につなぎ、ヴェルチンは足を早めた。

しばらく歩くと、しきりに兵が出入りする部屋を一人は見つけた。何気ない振りをしながらまずはヴェルチンだけがその部屋に近付き、中の様子をうかがう。Hミリアが心配そうにそれを見守っていると、ヴェルチンはすぐに戻ってきた。

「あの部屋が指揮所で間違になさうだが王はいなかつた。中に入るのは兵士だけだ」

「じゃあもう逃げ出したってこと?」

「いや、そういうわけでもなさそうだ。漏れ聞こえてきた話だと王は自分の部屋から出てきていいらしい」

「……守りがいが無いわね。まあ、それはそれで好都合よ。王の部屋を探しましょう」「うう」

そう言つてHミリアは動き出さうとするが、急にその足を止める。

怪訝に思つたヴェルチンがエミリアの視線を追つと、その先にはまだこちらに気付いていないベトレイが顔を強張らせた状態で歩いていた。

王の部屋から出て指揮所へ向かつて歩いていると、ふとベトレイは自分への視線を感じた。周りを見渡すと、遠くの方から一人組の兵が自分を見ている。しばらくの間お互に視線を交わした後に気がつく。ヘルメットで分かり辛いが大きい方はヴェルチンであった。となるともう片方はエミリアか。エミリアの方は鎧が合つておらず、知らずに見ていたらこの兵は大丈夫なのかと不安に思つただろう。

城に一人が潜入してくるとは予定外のことであつた。どうやって、と考えるのを我慢してベトレイはすぐ対応策を練る。しかしそう簡単に筋書きを替えることは難しい。まずもつてベトレイは一人に近付いて行つた。

「……こちらへ」

ベトレイは小声で一人に話しかける。時間稼ぎを兼ねて、ベトレイは人のいない部屋に一人を連れていくことにした。

無人の一室に入ると、ヴェルチンたちはヘルメットを外した。

「お一人とも、どうやつてここへ？ 出入り口は完全に封鎖されてるはずですが」

まずはベトレイが疑問に思つたことを尋ねる。

「ああ、まあどうかな」

言葉少なにヴェルチンは返した。前に聞いたメイドさんの話をそのまま受け取れば、ベトレイの立場はかなり曖昧なものだ。味方かどうか不確かである以上、なるべく情報は与えない方がいいだろうとヴェルチンは判断した。

「そんなことより、王はまだこの城の中にはいるの？」

ヴェルチンと同様の考えでいたエミリアが割り込んだ。

「ええ、まだこの城の中にはいます。ですが、『自分の部屋に閉じこもったまま』……」

「それはどこ？　会いに行くわ」

「今は王は誰にも会いたくないと、扉を固く閉じてしまっています」

「いいわ、扉を無理やり壊してでも会つてもらひ」

矢継ぎ早に発せられる言葉に、ベトレイは焦りが顔に出るのを必死に抑えていた。状況は非常にまずい。一人が王に会うことになるとては、彼らが死んだと思っている王に疑問を抱かせてしまう。そのまま二人が話をすり合わせていったら……。

「……分かりました。私が王のところに案内します」

少し考えた後、ベトレイはそう告げた。

「まずは指揮所に行つて現状を確認した後、その報告として王に会いに行く形にしましょう。それなら王も部屋を開けてくれるはずです」

ベトレイの言葉を聞いて、二人は一瞬視線を交わす。少し間があった、ヴェルチンが答えた。

「分かった。そうしよう」

「ではここで待っていてください。すぐに戻ってきます」

その言葉にエミリアが口を出そうとするが、すぐにヴェルチンの視線に気付いてそのまま黙る。ベトレイは一人に頭を下げる部屋から出ていった。

「一人で行かせてよかつたの？」

ベトレイが出ていった後すぐにエミリアが言った。ヴェルチンは首を振る。

「気付かれないように追うぞ。ベトレイがそのまま指揮所に向かえば信じればいいし、別のところに向かったならおそらくそこが王の部屋だ」

できれば指揮所に向かっていてほしいと願いながら、ヴェルチンはヘルメットを被り直した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6565r/>

それから勇者はどうなった？

2011年7月18日22時40分発行